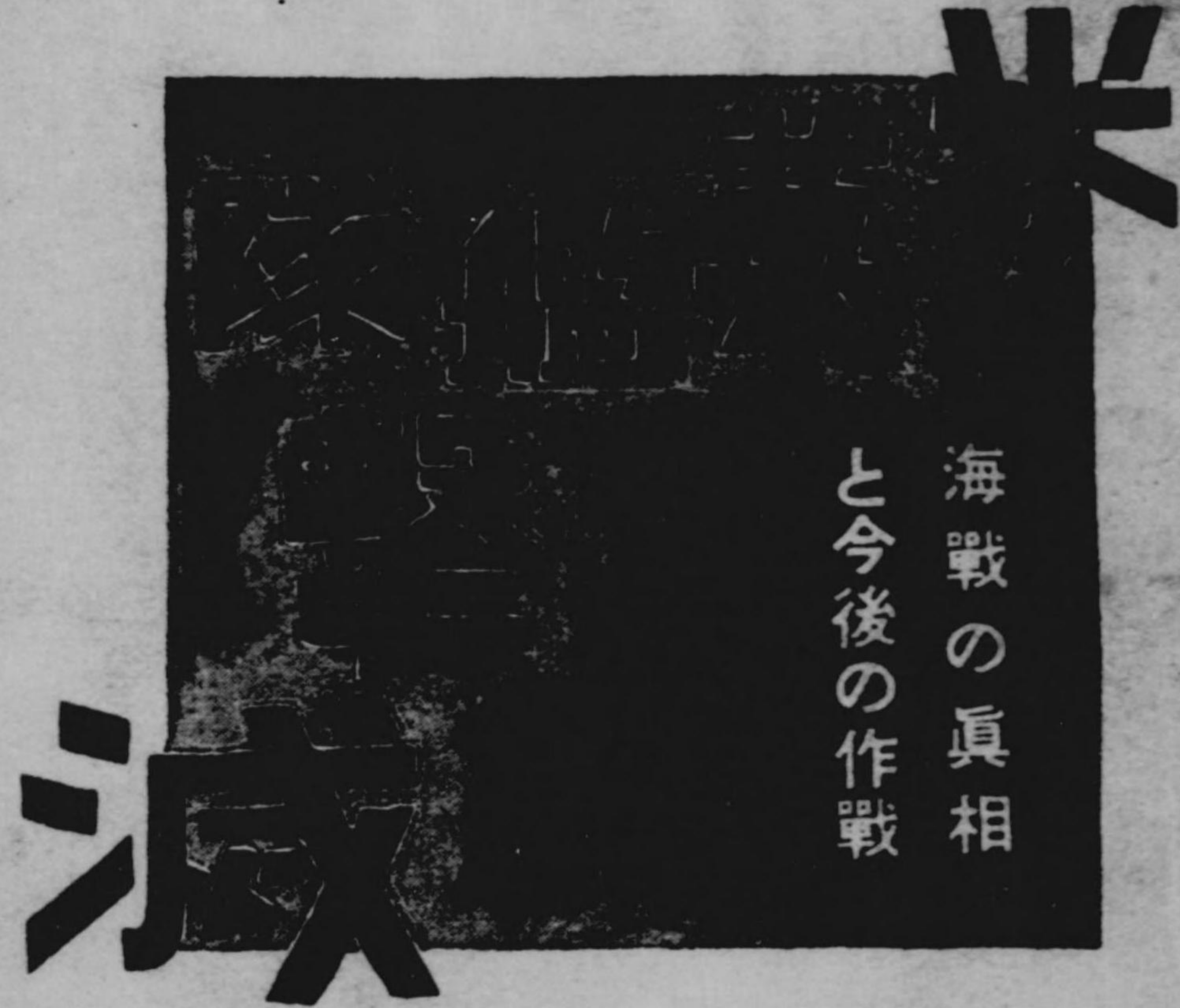


大本營海軍報道部長

戰局談話

平出英夫 大軍佐

397  
H64  
2



海戰の真相  
と今後の作戦

編輯委員會發行

興亞日本社

80.80



0057869-000

397-H64-2ウ

滅艦英米

著・平出英夫

社日本亞興

昭和17

AJG

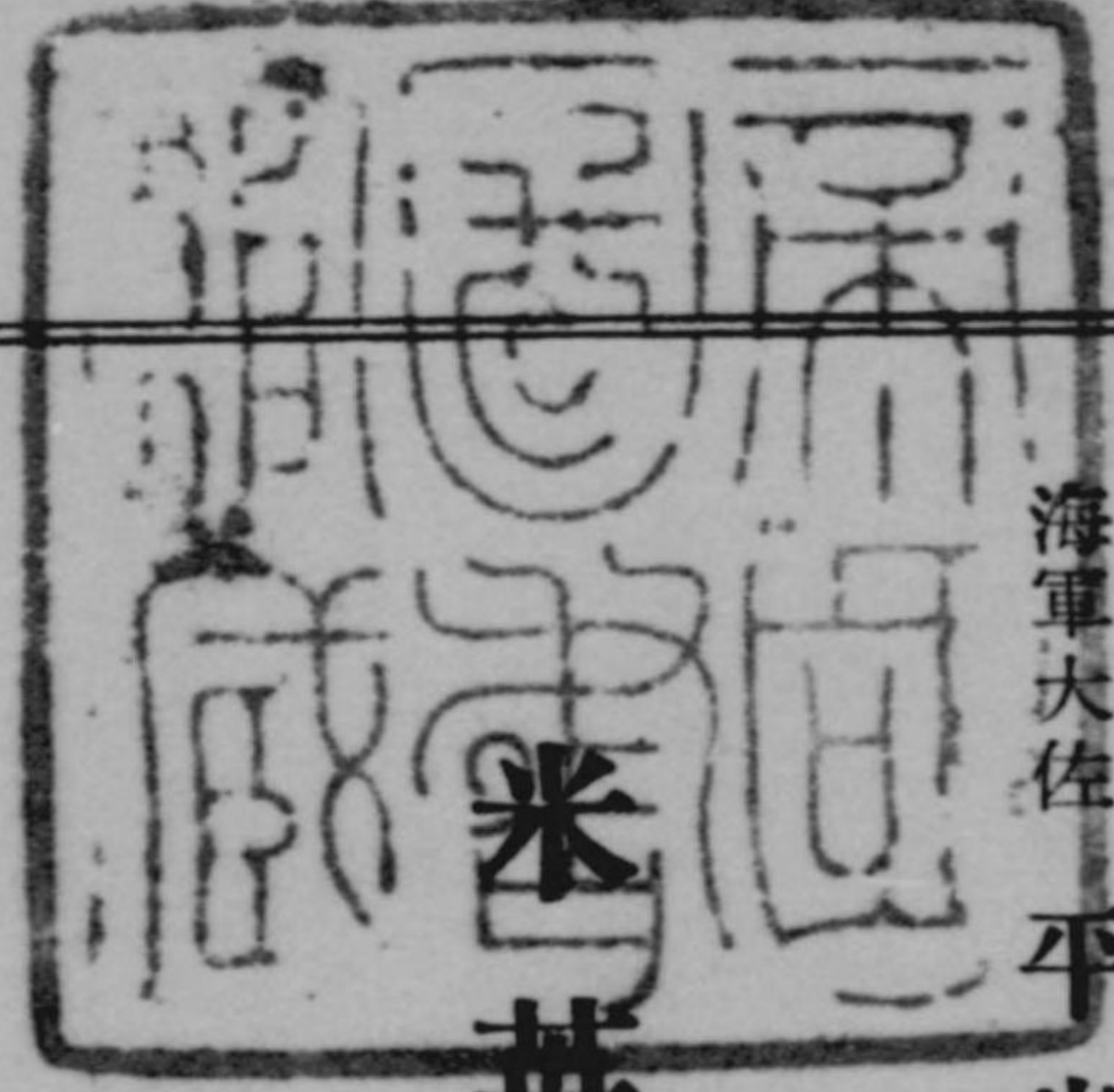


10/2.

471



397  
H64  
2



大本營海軍部檢閱濟

海軍大佐 平出英夫

戰局談話

英艦隊擊滅

興亞日本社版





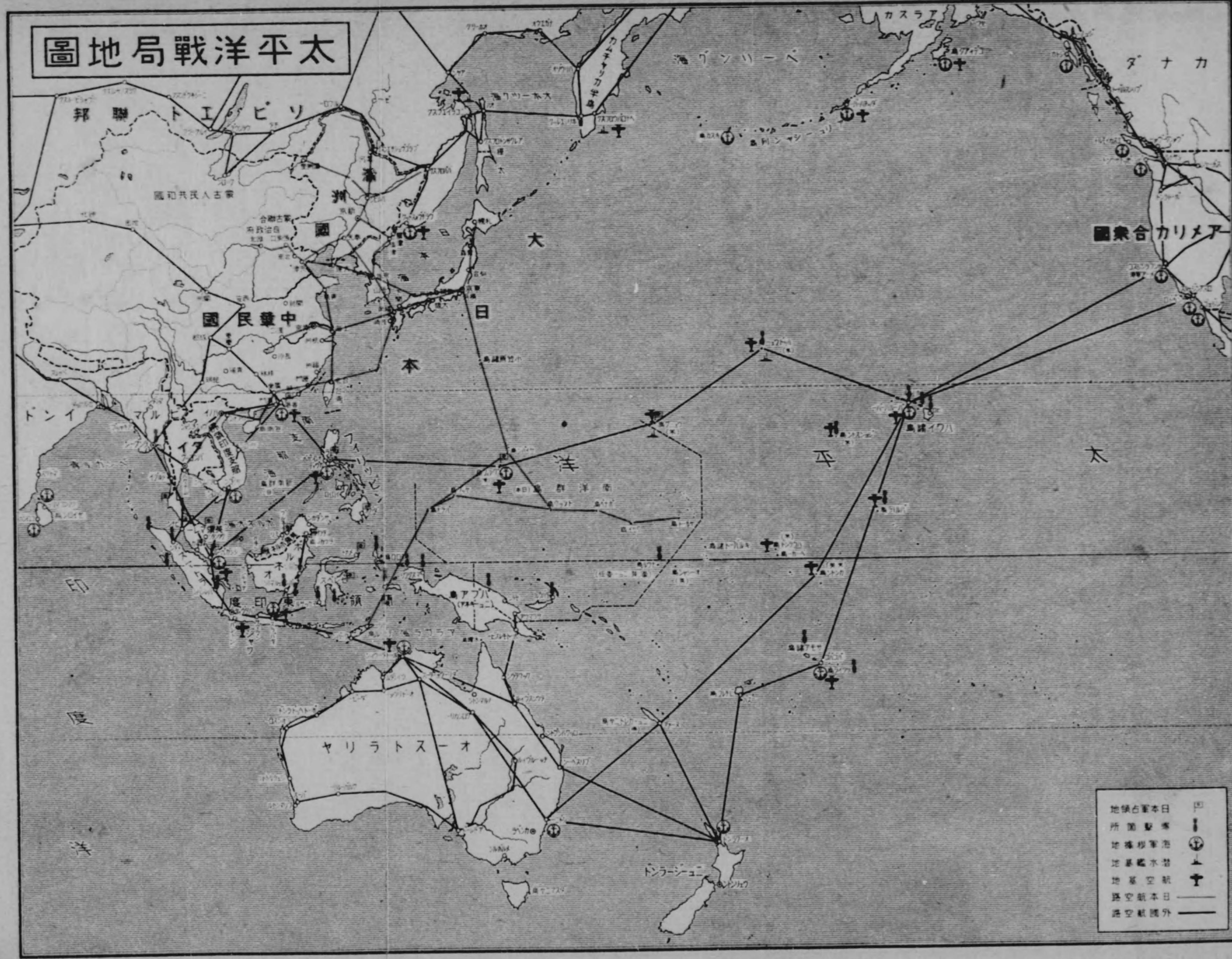
太平洋戰局地圖



日本國境  
外國國境  
日本軍  
盟軍  
日本海軍基地  
盟軍海軍基地  
日本空軍基地  
盟軍空軍基地  
日本海軍艦隊  
盟軍海軍艦隊  
日本空軍  
盟軍空軍



太平洋戰局地圖



地領占軍本日	☐
所圖製海	⊙
地據移軍港	⊕
地基艦水若	⊖
地基空航	✕
路空航本日	—
路空航國外	- - -



### 全滅せる太平洋の米英主力艦

艦隊別	所在	型別	■ 撃沈 ■ 大破 ▨ 中破	兵装
アメリカ太平洋艦隊主力艦	ハワイ	メリーランド型	 ウェストヴァージニア (31,800トン)  メリーランド (31,500トン)	40.6センチ砲 8門 12.7 " 12門 12.7センチ高角砲 8門
		カリフォルニア型	 テンネッシー (32,300トン)  カリフォルニア (32,600トン)	35.6センチ砲 12門 12.7 " 12門 12.7センチ高角砲 8門
		ペンシルヴァニア型	 アリゾナ (32,600トン)  ペンシルヴァニア (33,100トン)	35.6センチ砲 12門 12.7 " 12門 12.7センチ高角砲 8門
		ネバダ型	 オクラホマ (29,000トン)  ネバダ (29,000トン)	35.6センチ砲 10門 12.7 " 12門 12.7センチ高角砲 8門
			 ユタ (19,800トン)	標的戦艦
	比島		 ラングレー (1,1050トン)	5インチ砲 4門 搭載水上機 24機
	ハワイ		レキシントン型  レキシントン (33,000トン) 搭載機数 80~90	8インチ砲 8門 5インチ高角砲 12門 大型機銃 8門 カタパルト 1基
イギリス東洋艦隊主力艦	シンガポール	キングジョージ型	 プリンス・オブ・ウェールズ (35,000トン)	35.6センチ砲 10門 13.2センチ砲 16門
		レナウン型	 レナルス (32,000トン)	38.3センチ砲 6門 11.4センチ砲 20門 発射管(8)

目次

緒戦大戦果の真相

ハワイ海戦の全滅の真相

大石の戦術と補給隊の奇襲

(三)

(三)

(五)



目次

緒戦大戦果の真相……………(三)

ハワイ海戦の全滅の真相……………(三)

大石の策略と桶狭間の奇襲……………(五)

マレー沖海戦と巖流島決戦……………(三)


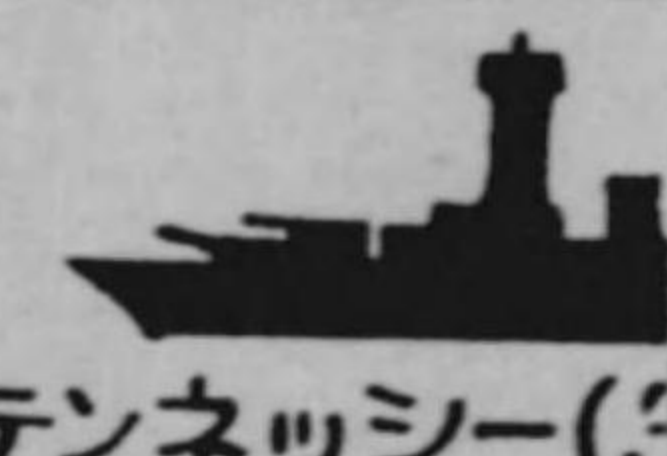


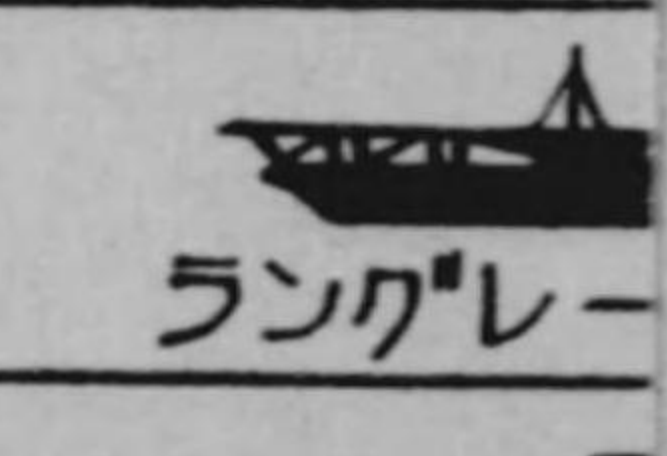
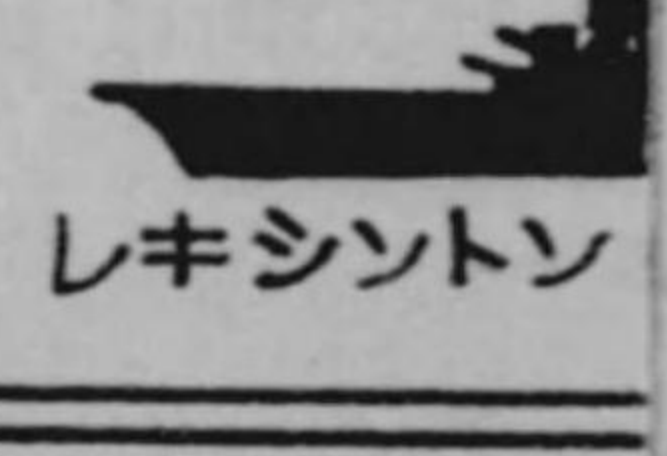

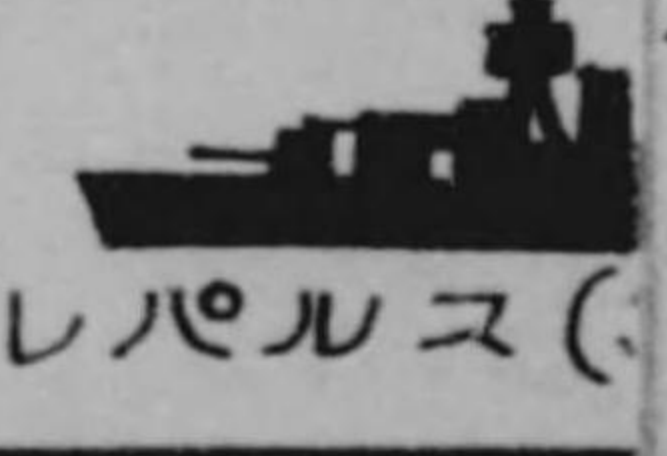
米英海軍の苦惱……………(三)

海軍氣質の相違……………(四)

わが忍苦二十年無休の猛訓練……………(四)

帝國海軍獨特の必殺戦法……………(五)

全滅せる

艦隊別	所在	型別	撃沈
アメリカ太平洋艦隊主力艦	ハワイ	メーランド型	 ウェストヴァージニア
		カリフォルニア型	 テンネシー(3)
		ペンシルヴァニア型	 アリゾナ(3)
		ネバダ型	 オクラホマ(2)
			 ユタ
	比島		 ラングレー
	ハワイ	レキシントン型	 レキシントン
艦隊主力艦 イギリス東洋	シンガポール	キングジョージ型	 プリンス・オブ・ウェールズ
		レナウン型	 レパルス(3)



米英今後の作戦……………(五九)

米英艦隊の合同作戦……………(五九)

星港陥落と新日本海……………(三三)

蘭印の脅懾と濠洲の動向……………(六九)

敵潜水艦のゲリラ行動……………(七)

わが本土空襲を狙ふ……………(七五)

開戦前の米海軍の全貌……………(八三)

アメリカ海軍の主脳部……………(二〇)

残存の米英海軍の戦闘力……………(三六)

三 長期建設戦と我等の覚悟……………(一五六)

持てる大東亞共榮圈……………(一五六)

持たざる富國アメリカ……………(一六六)

わが國土をねらふ空襲と商船撃沈……………(一七六)

希望ある我が前途……………(一八一)



まへがき

開戦たゞちに太平洋上に雄渾無比の電撃作戦を展開し、善謀果斷、瞬時にして、世界海戦史上その比なき米太平洋艦隊全滅、英主力艦隊全滅の大戦果をあげた帝國海軍の無敵振りは、國民の感激おく能はざるところであるが、その海戦の真相と檢討、忍苦二十年の帝國海軍不墮の猛訓練、更に、今後長期戦にいかに対處すべきかは、國民のひとしく聴きたいところと思ふ。

大本營海軍報道部課長平出大佐は、御繁忙の折にも拘らず、特に我が社の請ひを容れて、高話を賜はつた。さらに、大本營海軍報道部より解説的資料を得て、本書は纏められたのである。

従つて、報道部主務の許可指導のもとに、本書は刊行を見るに至つたのであるが、何分にも匆忙の際であり、以後の作戦の進捗その他の爲に、訂正を要する箇所や意に滿たぬ點もあることと思ふが、これらの文責上のすべては、編纂に當つた小社にあることであり、その點を附記する。

興亞日本社

米英艦隊擊滅



一、緒戦大戦果の真相

ハワイ海戦の全滅の真相

昭和十六年十二月八日、長くも對米英宣戦の大詔渙發されるや、善謀果斷構想雄大なる電撃作戦は、帝國陸海軍の緊密なる協力のもとに西南太平洋一帯にわたつて決行されたのである。

さて、米英に對する宣戦の大詔を奉戴して、恐懼感激した我が海軍の將兵は、一死奉公の誓ひ固く、蹶然として起ちあがり、長驅してハワイへ、雄渾



無比の電撃奇襲作戦を敢行したのであつた。

このハワイ海戦を展開するまでは、あたかも大石内藏之助が山科に閑居して長い間策略を練つてゐたのに髣髴としてゐる。わが海軍は、忍苦二十年、秘かに今日あるを期して、血の滲み出る猛訓練をつゞけて來たのであつた。その間、敵を欺むくと同時に、味方をも欺き、その爲に國民の一部では、わが海軍は、弱勢にして遂にアメリカに起てずとさへ云ふものがあつたからである。

その忍苦を脱して、ハワイを奇襲した態勢は、まさに桶狭間の電撃作戦に似通つてゐる。しかし、その規模の雄大にして、戦果のいかに大であつたかは云ふまでもないことと信ずる。

### 大石の策略と桶狭間の奇襲

わが空襲が決行されたのは、朝の八時前後であつた。八日を遡る二三日の間は、ハワイ方面は、相當に暴風雨が海上を吹きまくつてゐた。これは恰かも、元寇の役の神風を逆にしたやうなもので、わが海軍の企圖を全く隠蔽してくれるのに役立つた。

普通であれば、當然ハワイから數百哩に亘つて、飛行機をもつて哨戒をしてゐるのであるから、必ずこれは見つけられた筈である。それが見つけられなかつたといふのは、その風やその雨が、哨戒の自由を失はしめてゐた爲であらうが、いはゆる神風が逆に吹いたと云へるのである。



わが海軍が隠密のうちに肅々として迫つてゐたのであるが、敵はよもや、この暴風雨を冒して此處まで攻めて來ようとは思はず、油断をしてゐたやうである。

まさしく、暴風雨は我にとつては天佑であり、神助であつたのである。

當日は、日曜日の朝のことで、彼等は、土曜日、日曜日は休養することにきめてゐるから、最も氣の弛んでゐる最中であり、戦慄すべき死の空襲が、數刻の後に迫つてゐようなどは夢にも思つてゐなかつたであらう。

おそらく、その前夜は、呑み且つ興じて、その兵員の過半数は、陸上の宿舎で、安らかな夢路をたどつてゐたものと思はれる。

この時、わが海軍攻撃部隊へオアフ島攻撃の命令が到着したのである。航空編隊指揮官のその後の實戦談によれば、その命令を受けるや、甲板上に整

列した全員は、さすがに感激と昂奮で全身が熱くなるのを感じたといふ。その時三十六年前日本海海上に上つたZ旗が再び太平洋上に翻騰と翻つたのである。

當時、北東十七米突の強風が吹き荒び、濛々たる密雲が立ち籠めてゐる。しかも動搖烈しい母艦の不安定な甲板から我雷撃隊は飛び出して行つた。或ひは強力な爆弾を携へ、或ひは得意の空中魚雷を抱いて、この二大編隊が突如として、亂雲を切つて一直線に、先づ雷撃機より突入したのである。

この點はある情報、または同地の目撃者の談話發表などからしても推察されるが、大編隊は、真珠灣の正面から衝かずに、背後の山腹を梢の葉とすれすれになる低空飛行を敢行して、いきなり強烈な奇襲を展開した。灣内には米太平洋艦隊の主力艦は二隻づゝ整然と投錨してゐた。



しかし、この眞珠灣は淺くて狭いので、雷撃隊は、單機となり、或るものは海面すれ／＼にまで舞ひ降り、或るものは艦腹二三百米突まで突進して行つた。空中魚雷を發射して敵艦を撃沈させるのには、條件はまことに悪い。これが灣が廣く、艦船が、散開して碇泊してゐてくれたら、空中魚雷を餘裕をもつて發射せしめ、撃沈することも樂なわけであるが、狭くて、ぎつしりと列んでゐるのでは、その艦側に、一つ一つ魚雷を命中させることは、よほどの名人技に屬する。

雷撃隊の後には、すぐ急降下爆撃機が飛びこんで行つた。さらに大型爆撃機が、悠悠々と旋回して、整然と敢行された。

これには入神の技に屬する條件が必要である。しかし、この撃滅の結果は偵察寫眞、目撃者等の報告判断によれば、強力な爆弾の爆砕力と相俟つて、

完膚なきまでに叩き潰されて、慘澹たる様相を呈するに至つたのである。

彼等が驚愕して發砲應戰したのは、漸く次の空襲からであり、敵がいかに狼狽の極に達してゐたかがわかる。この間に、すでに敵の兵舎、航空基地は思ふ存分に叩き潰され、確實に撃墜破せる敵機は約四百六十機と推定される。

一方、空に氣を奪はれてゐる敵艦隊に對し、突如細き灣口より決死の潜入せるわが特殊潜航艇隊の奇襲攻撃が開始されたものごとく、この爲に、敵は、文字通り驚天動地の大動搖を來たし、錨をもいで遁走を企つもの、淺瀬に乗り上げるもの、我が潜航艇の猛撃に慄伏するもの、數ふるに違あらず、眞珠灣内の朝暎の中で、あるものは船體が眞二つに切断され、海面にドス黒い油を吐き、又は見にくい赤腹を出して沈没しつゝあり、または炎々と燃え上つてゐるものありと云ふ、これらの實戰談に徴しても米國が誇大桐喝の具



に供した太平洋艦隊は、僅か一時間半にして全滅してしまつたのである。

我が奇襲は、作戦の妙味を發揮し、緒戦に、このやうな大戦果を獲得して今後の作戦をきはめて有利に導く結果となつた譯であるが、いかに、この奇襲が猛烈であつたかは、市民も非常に慌てふためいて、寝巻のまま、飛び出し、晝頃まで茫然として街を歩いてゐたといふ情報でも窺はれるし、そして、敵がいかに油断してゐたかが、これを以つても想像される。

かくまでに、敵を欺き、時には味方も欺いた故に、大石の山科の閉居にとへるのである。

この空襲が敵側に與へた衝動のいかに大であつたかは、眞珠灣の港口附近で襲撃された敵航空母艦の飛行機に對して基地に還れといふ命令が發せられ飛行機は母艦を捨て、飛び立つて、ハワイ基地の上空にさしかゝると、いき

なり防禦砲火の火蓋が切られて、それら目をかけて盛んに撃ち出した。

「味方だ、味方だ、射ち方やめ！」と云ふ號令が盛んに出たが、それにも拘はらず、慌てふためいて狂氣のごとく、わが空軍をおそれた防禦軍は、さかんに射つて射つて射ちまくり、殆んど味方の飛行機を全部射ち墜したといふ情報もある位である。

また、アメリカ本土では、アメリカの太平洋沿岸は勿論のこと、大西洋沿岸に至るまで、日本空軍の來襲せるものゝ如しとか、日本の海軍陸戦隊が上陸するやも知れずとか、又は太平洋沿岸の大都市一帯には、急に燈火管制が實施されてゐることからしても、いかにこの空襲の影響が大きかつたかが想像されるのである。

しかし、これらの空襲の特徴としては、わが海軍航空部隊の攻撃目標は、





真珠湾軍港見取圖

全部碇泊せる艦船、それから航空部隊並に軍事施設に向つて行はれたといふことである。

したがつて、何千人といふ死傷者の出たことは向ふのニュースに發表されてゐるが、その中で市民が、損傷を受けたものは、非常に少かつたとアメリカでも云つてゐる。これによつても、いかに我が襲撃が正確に行はれたかが裏書されるのである。

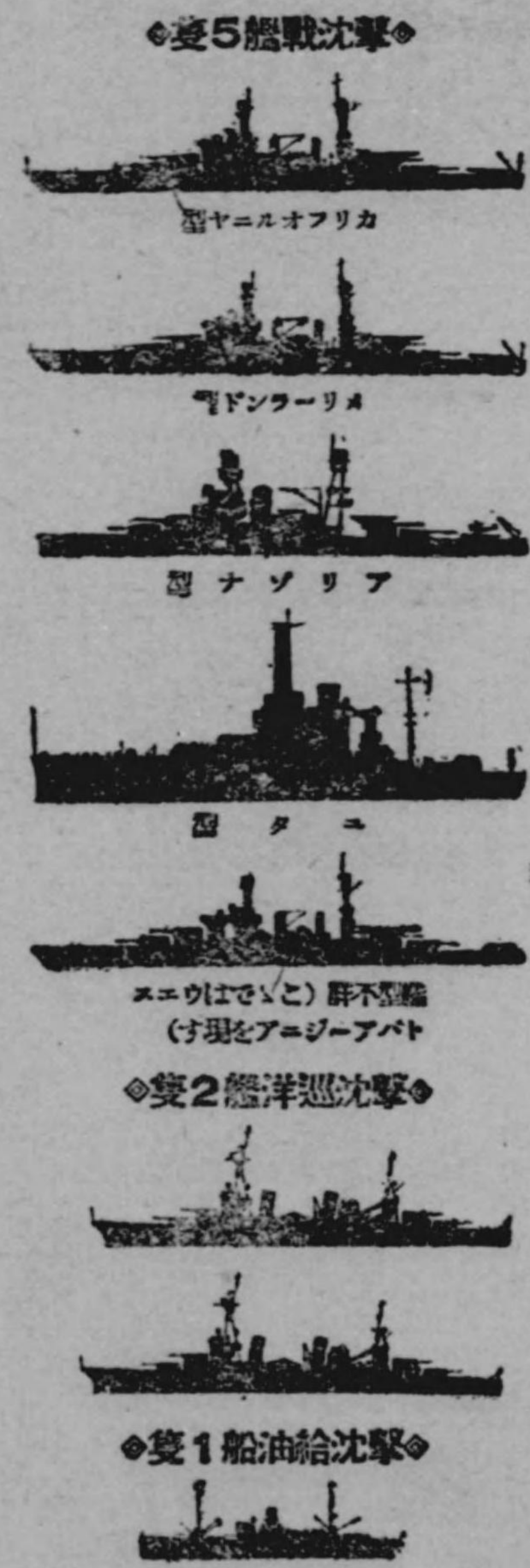
この戦果が、従來の海上戦闘の常識を絶したる熾烈強大なものであつたことは、攻撃實施部隊の目撃ならびに攻撃後の寫眞偵察等、さらにその後

の詳細報告により判明した。即ち米戦艦にして撃沈、撃破されたもの總計九隻に及び、これは實に戦前より太平洋上に遊弋し無禮極まる挑戦を我に行ひつゝあつた米太平洋艦隊の主力艦の總數九隻にあたり、八日早曉、帝國海軍航空隊並に精銳なる新兵器特殊潜航艇隊が敢行せる果敢なる必殺の劍は、一瞬にしてこの米大艦隊の全主力を屠り去つたのであつた。しかも同海戦において敵が失へる艦艇は、この九隻の戦艦を筆頭として各級巡洋艦、驅逐艦その他合計廿隻に達し、航空機また四百六十餘機を撃破し、正に豪壯極まりなき大戦果であつた。その内譯は、

(一) 撃沈せる戦艦五隻 (カリフォルニア型一隻、メリーランド型一隻、アリゾナ型一隻、ユタ型一隻、艦型不詳一隻) 甲巡または乙巡二隻、給油船一隻



録記の利勝



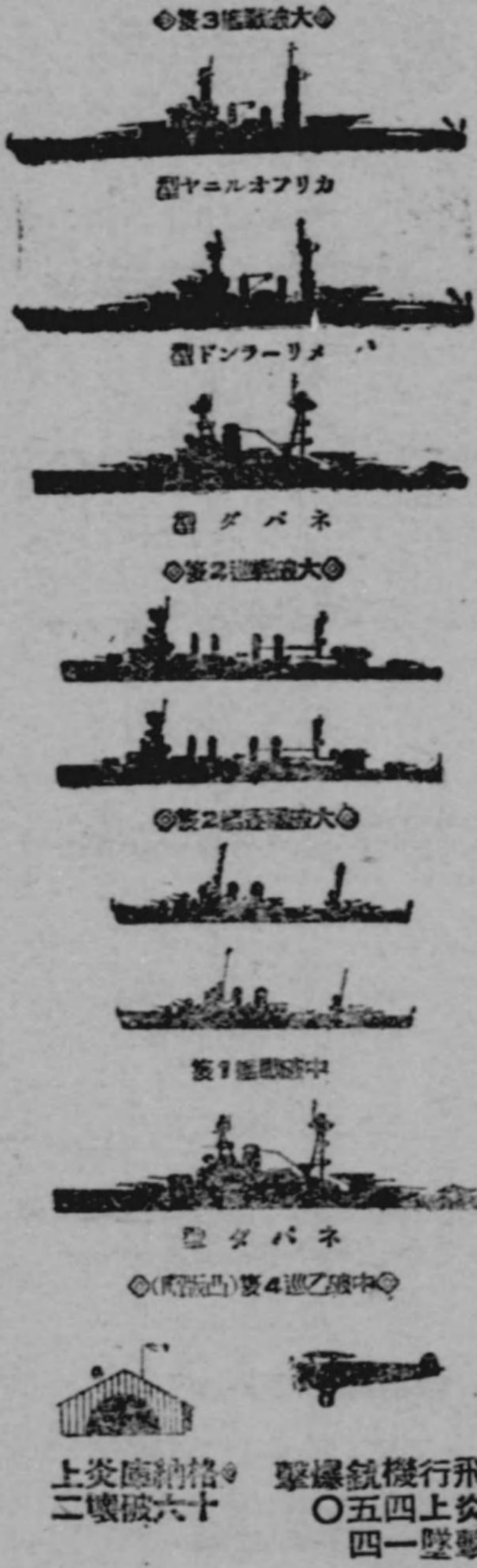
(一) 大破 (修理不能または極めて困難なるもの) 戦艦三隻 (カリフォルニア型一隻、メリーランド型一隻、ネバダ型一隻) 軽巡二隻、驅逐艦二隻

(二) 中破 (修理可能と認むるもの) 戦艦一隻 (ネバダ型一隻) 乙巡四隻

(三) 敵陸海軍航空兵力に與へたる損害は銃爆撃により炎上せしめたるもの約四百五十機、撃墜せるもの十四機、右のほか撃破せるもの多數、格納庫

十六棟を炎上、破壊二棟に及んでゐる。これに對し我が方の損害は、飛行機廿九機、未だ歸還せざる特殊潜航艇五隻である。

この海戦に於て初めて登場せる特殊潜航艇をもつて編成せられた特別攻撃隊は、航空部隊の眞珠灣急襲に呼應し、警戒嚴重を極むる眞珠港内に決死突



一、緒戦大戦果の真相



入し、味方の荒鷲が投下する爆弾と火を吐く敵砲火を物ともせず、霧らに獲物である敵艦に襲ひかゝり、或ひは單獨強襲を決行し、少くとも前記の戦艦アリゾナ型一隻を轟沈したる外、大なる戦果を挙げ、敵艦隊を震駭せしものにして、その歸還せざる五隻の乗員は、ハワイ上空に散華せる二十九機の海鷲の魂と共に、永くわれらの脳裡にとゞまるであらう。

かくして、華麗を誇つた真珠灣は、今や撃沈されたる戦艦、大破せる戦艦をはじめ、無数の小艦船の無残にして亂雑なる屍の地獄圖繪と化したのである。最早や、太平洋上に一隻の主力艦をも有せぬ、米海軍の艦隊による對日決戦は、今となつては、大西洋上にあるその殘餘の全戦艦九隻を廻航せざる限り、全く不可能であつて、盟邦獨伊兩國が對米宣戦を行つた今日となつてはその大西洋艦隊の全的廻航は作戦上到底實施し得ないところである。よし作

戦を無視し、大西洋の全艦隊を廻航反撃するとも、わが帝國海軍の善謀勇戦により鎧袖一觸の悲運を再び喫するは明白であり、その一部廻航の如きは單に米西海岸防衛にいさゝかの役割を果すに過ぎず、遠航進攻するなどは全く笑止の沙汰と考へざるを得なくなつた。

太平洋、大西洋の兩艦隊を合し主力艦十八隻の威容を誇れる米海軍は、いまや全くその巨像の半身を奪はれ、その建直りは今後一隻の喪失損傷なく、建艦に全能力を集中するとも四、五年間は絶対に不可能である。

かくして我が海軍は、緒戦その立ちあがりにつれて、すでに絶対有利な態勢を獲得することに成功したのである。

しかしながら米海軍にとつて、眞に戦慄すべきこの日も、決して偶然にして彼等を見舞つたものではない。



思へば、この大戦果は、實に萬斛の恨みの涙を吞んで引き上げたワシントン會議以後、五・五・三の劣勢比率を押しつけられた帝國海軍の、以來二十餘年、血の滲み出る猛訓練の成果がものゝ見事に現れたのである。

さて、わが海軍は、開戦劈頭、何故ハワイを奇襲殲滅せしめたか、その意義は、次のことに立脚したものである。

元來、眞珠灣軍港を中心とするハワイは、米海軍が、太平洋作戦の一大樞軸點として眞珠灣軍港の築造に十億ドルといふ巨費を投じたばかりでなく、多年にわたつてその築造に懸命となり、地中海のジブラルタル、マレーのシンガポールと相並らんで、世界の三大軍港として米海軍が列強海軍に誇つてゐたのである。

ハワイを頂點として、アラスカのダッチハーバーとバナマとを結ぶ線を底邊とする三角形こそ、米海軍の太平洋三角形防衛線といはれて、他國軍の侵入を許さぬ米國の生命線であつた。この生命線の頂點を、戦争劈頭わが軍によつて崩潰されたのである。

さらに、ハワイは、日本から去ること三千百哩であるのに對して、アメリカ西岸からは僅かに二千哩の洋上であるから、有名な海軍評論家バイウオーターも『日本海軍が現在もつてゐる主力艦の隻數では、たうてい貴重な艦隊を派遣するはずはない……』と斷じてゐたやうに、ハワイは、米海軍の對日渡洋進攻作戦の最重要な足場にこそなれ、日本海軍がよもや對米決戦の血祭りにこゝを屠るといふ逆手戦法に出るなどといふことは、かつて世界の軍事専門家の筐底に存しなかつたのである。



米海軍の太平洋艦隊は、特に本年恒例の大演習を中心として眞珠灣に集結し、同灣内外で絶えず猛訓練を行つてゐたのである。

わが海軍が、ことさらに日曜日未明を狙ひ、しかも太平洋戦争はまづ通商破壊戦から開始されるだらうといふ通説を一擲して、堂々と、驚くべき放膽さで敵の主力部隊の攻撃を敢行したことは、全く敵の虚を衝いた奇襲戦法であつた。

ハワイ攻撃は、實に帝國海軍が、日露戦争直後から、三十餘年間にわたつて検討をつゞけてきた太平洋戦略の根幹であつたのである。

このハワイは大小八つの火山系諸島、無数の無人島からなる總面積七千七百平方マイル、わが四國より稍小さい群島である。

こゝに米國は、約五十年前から軍備に着手し、世界一と誇稱する大浮ドツ

ク築造、工廠擴張、潜水艦根據地、航空施設等々を行つたのである。その戦前の兵力は海軍戦艦七乃至八、甲巡十一、乙巡六、輕巡四、航空母艦三、驅逐艦約卅、潜水艦約卅、その他を合して二百五十隻、米太平洋艦隊の殆んど全主力がゐたが、宣戰第一日早くも再起不可能の全滅的打撃をうけてしまつたのである。

陸軍においては、元來ハワイは海軍第一主義をもつて攻撃に備へて居り、昨年六月ごろは僅か一ヶ師に過ぎなかつたものが、フランス敗戦後より急ピツチで陸軍擴張を圖つてゐたのであつたが、これは攻撃基地から防備地へ變貌したことに對する焦躁の付け焼刃であつて問題にならぬものである。

空軍も亦、オアフ島内のスコットフィールド兵營付近を中心に大擴張を行ひ、その大飛行場には、長距離飛行隊五ヶ中隊を置き、その他ハワイ西方八



百渾のジョンストン、バルミラ兩島を飛行艇、潜水艦の基地として軍備を整へてゐたのである。

畏くも 大元帥陛下は 十日次の如き御勅語を、わが聯合艦隊司令長官に賜つたのである。

聯合艦隊ハ開戦劈頭善謀勇戦ニ布哇方面ノ敵艦隊及航空兵力ヲ撃破シ偉功ヲ奏セリ

朕深ク之ヲ嘉尙ス將兵益々奮勵シテ前途ノ大成ヲ期セヨ  
かさねて、十二日再び御勅語を賜はつた。帝國海軍としての名譽これ以上ものなく、全員感激奮起し、いよく今後の作戦に對して、絶大なる戦果をあげるべく、一層ふるひ立つたのである。

### マレー沖海戦と巖流島決戦

ハワイ海戦が、大石の策略と桶狭間奇襲の組合せの成功と見るならば、マレー沖海戦は、巖流島に於ける宮本武藏の果し合ひにも比すべきであらう。  
即ち、ハワイ海戦は、作戦としての妙味を發揮したのであつて、これのみで實力を判断することは、やゝ早計であるが、マレー沖海戦は、敵は不沈戦艦を誇り、正面から傲然と戦闘態勢をととのへて挑戦して雌雄を決した一戦であるから、實力に於て、わが海軍が、英海軍に立ち勝つてゐたことが實證された譯である。

即ち、巖流島で、宮本武藏は、燕返しつよめがへの劍法けんぽうに對して飛切りの術によつて



巖流を撃ち倒したのと同じ理窟で、たゞそれよりは渾然たる科學技術と精神力に物を云はせて、遙かに廣大な立體戦を展開したのである。

マレー沖に、何故、英國艦隊が出て来たかといふ理由は、次の二つであらうと信ずる。

若しわが海軍のハワイ海戦の奇襲戦法を知つてゐればこの儘ゐたらばハワイの二の舞をくらつて全滅させられてしまふかも知れないからと危懼して出たといふのと、それから今一つの想



像は、マレー東岸に上陸してゐる日本軍に海の側面から妨害を與へやうとしたのではないかと考へられる。

この軍艦によつて陸軍に妨害を與へるといふことに就ては、彼等は非常に甘い經驗をもつてゐるすなはち、昨年春、アフリカに於て獨伊の機械化精銳軍がエチプトに侵入した時、海岸から英艦隊の砲撃妨害で相當な損害を與へて、時候が炎



熱になつたといふ理由もあつたと思ふが、ともかく獨伊軍のエチプト攻略を中止させるのに役立つた。この成功を信じてか、今度も亦出動して来たのではないかと思はれる。



ところが地中海艦隊の時にはなかつたが、マレー沖では日本の海軍航空部隊が、てぐすねひいて待ち構えてゐたので、この計畫は見事に齟齬してしまつたのである。

シンガポール軍港から、レバルス號と大型驅逐艦を率ゐて、我に向つて來たプリンス・オブ・ウェールズ號こそは、英海軍がネルソン以來の傳統と誇りをもつて、その技術を傾けて建造せる云はゞ英海軍そのものを象徴する最新鋭の主力戦闘艦なのである。

かのビスマルク號の追躡に一役買ったキング・ジョージ五世號とは姉妹艦で、本年四月竣工し、基準排水量は三萬五千トン、十五萬二千馬力のバーン式タービンを据ゑ、三十ノット以上といふ戦闘艦としては驚異的なスピードをもつてゐたのである。わが海軍の戦艦の速力の速さに對しては、他のの

ろい戦艦では、刃が立たない。そこでこれに對抗するために、大切な虎の子の戦艦を東洋に回航させた譯である。

その攻撃力の主體となる主砲は、今時としては珍しい三十六センチ（十四インチ）砲をわづか十門もつてゐるに過ぎぬが、砲身から尻栓に至るまで全く改良された新式砲で、約九百キロの巨弾を齊射し、着弾距離は從來の三十八センチ砲よりも大きく、破壊威力は以前の四〇センチ（十六インチ）砲にまさると誇稱してゐたものである。

しかも同艦の最も大きな特徴は、對空防禦を思ひ切つて強化した點で、縦横各五列に銃身をならべた二十五聯装といふ、世界最初の高射機銃を三基、二十聯装のを一基備へてをり、この他一キロの弾丸を毎分八百發以上發射するといふ自慢の八聯装對空ボムボム砲を四十八基据ゑつけてあつた。



この銃砲が一齊に火蓋を切れば、毎分一萬發の彈丸が、幕のごとくに發射されるわけである。更に、水線附近の装甲四十センチで、艦底は三重底を誇つてゐる。この厚さでは、彼等の常識では到底ブチ破られるものではない、そこで不沈戦艦と豪語してゐたのを、魚雷を見事炸裂せしめたわが威力こそこれぞ撓まぬ研鑽の結實なのである。

さて、イギリス極東艦隊旗艦プリンス・オブ・ウェールズ號は、トーマス・フリッツプス大將が司令長官として坐乗、戦艦レバルス號と相前後して、十一月十八日ケープタウンを出港し、經濟速度を無視した高速力でインド洋を横斷、去る十二月二日シンガポールに入港したのである。この時、東洋にある英米人は、雀躍狂喜してこれを迎へたと云ふ。

わが勇猛果敢な海鷲の連續的なシンガポール猛爆下から脱した、ウェール

ズ號はわが海軍艦艇の水も漏さぬ監視網を知るやしらずや、高速戦艦レバルスをはじめ輕巡洋艦を伴つて、つひに港を出たのである。

マレー沖に、英國東洋主力艦隊現はれる、との報は、哨戒の任に當つてゐた我が潜水艦から發せられたのである。

わが潜水艦は敵艦をねらふのが目的であるが、海底を追跡する潜水艦の速度はこの場合、高速戦艦に及ばないのは理の當然である。そこで、報告を發したのであつた。それとさくや、爆彈を抱き、空中魚雷を擁へて待機してゐた海軍航空部隊は、一齊に羽搏いて、南海一面を探索に駆け廻つたのであるが、南海特有の海霧に視界を遮られて、やむなく基地に舞ひ戻つたが、その夜は無念やる方なく、まんじりとも眠れなかつたといふ。

爆彈を抱き、魚雷と共に一夜を明かした航空部隊は、夜明けと共に、再び



勇躍出動

椽の下の力持ちの苦心の哨戒をつゞけてゐたわが潜水艦隊の再発見通報と相俟つて、目ざす待望のイギリス最新戦艦プリンス・オブ・ウェールズに、雲間よりめぐりあふたのである。

十日朝マレー半島クアタン（十二月三十一日占領）沖の出来事である。この時ほどわが海軍將兵の心が振ひ立つたことはない。しかし、敵もさるもの、かねての用意、世界最新の高射機銃や、自慢の八聯裝對空ボムボム砲を一齊に向けた。艦の上空は毎分一萬發の物凄い彈幕と化し去つた。

彼等は、これならば、絶対に敵機が近づけないと確信してゐた。事實地中海戦では、獨伊の雲霞の空軍で大空襲を受けた場合でもさうであつた。即ち、歐洲に於いては、この戦艦の上へ來た敵空軍は、大編隊が一緒になつて、非

常な高度から、ばら／＼と爆彈を落すやり方で攻撃を加へてゐたのである。従つて滅多に當らないし、偶然に命中しても、装甲を誇る新鋭戦艦である。それしきの事はなんでもない。魚雷に對しても底は三重底となつてゐてさらに沈没のおそれはないのである。その觀念で、わが海軍航空部隊を迎へたのである。しかし、今度は、いささか違つてゐた事を彼等は發見したのであらう。

襲撃？と、思つた次の瞬間には、大きく鵬翼を擴げて、頭上をひつ搔かれんと思はれるばかり、掠めて飛び去るわが海空軍の強襲であつた。あたかも黒い爆藥を抱いて捨身で飛びこんで來たと、彼等の眼に映じ、彼等が驚愕したのはこゝである。即ち、わが海軍航空隊の精神力が、火の如くに現はれたのである。わが海軍少年航空兵となつたものは、年齒いまだ至らざるのに、



入隊一年後には、誰しも「われらは、日本のために喜んで死んで行く。」と云ふ尊い大きな信念を抱くやうになるのである。それが一年半後には、更に深く徹して、「われらは、敵を倒すまでは断じて死せず。」と云ふ信念にまで、突き進むのである。命を棄てるだけの事ならば、神経衰弱に悩む人間でも實行できることである。しかし、強敵を倒して後にやむと云ふ精神は、それとは別の尊いものである。この強い美しい海軍魂にまで昂揚された少年航空兵出身者が、いまや彈幕くらひを怖れぬのは當然のことである。

必殺の戦法は、そこに生れる。彈幕も死も少しも怖ろしくない。わが海軍機は、この必ず射ち落とされると思はれる物凄い彈幕を、いづれも無事に突破して、敵に突入し、ぶつかつて行つたのである。そこにこそ死中活を得ることができたのである。

わが海軍は、敵艦の〇〇米の低空にまで迫つて空中魚雷を放つた。また、強力な爆彈を抱いて急降下で喰ひ下がる。

この強力な戦術にかゝつて敵は周章狼狽し、遂には三十六種の主砲で防空禦に當るといふ、世界海戦史上最初の應戦を試みつゝジグザグに航路を變更して逃げんとすれど、こちらは食ひさがつて離れない。先づレバルス號は、轟沈し、つゞいて氣息奄々たるプリンス・オブ・ウェールズ號も、大水煙を捲き上げて撃沈され、さしも不沈戦艦と豪語した英東洋主力艦隊もここに全滅してしまつたのである。

かくて、七つの海を制すと世界に誇り、ネルソン提督以來の傳統に強力を誇つたイギリス海軍主力も、わが帝國海軍の前に瞬時に潰え去つたのである。一つ此處に銘記されたいのは、今回の航空隊のあげた戦果によつて、今後の



海戦の主體は、航空機に重點をおくのではないかと推察する聲を聞くが、マレー沖海戦において潜水艦が敵艦隊を最初確認したにもかゝらず、何故攻撃しなかつたかは、潜水艦は海中において僅か〇〇節の速力であり、これに對して高速戦艦は三十ノットの速力で航行してゐるので、これを追躡攻撃し得ない状況にあり、従つて航空隊に直ちに報告してきたのである。ハワイ海戦にては航空隊の出動の蔭には、航空母艦があり、その他の艦艇もこれと共に行動し居るのであり、この戦果はただに航空隊單獨の戦果に非ずして、艦隊の総合的作戰による戦果であることをこゝに確言する次第である。

さて、プリンス・オブ・ウェールズ號はさき大洋でドイツ戦艦ビスマルク號を屠つたドイツにとつては宿怨の戦艦であり、またチャーチル、ルーズヴェルト洋上會談の際にも使用され、またレバルス號はフッドおよびレナ

ウンと共にイギリス海軍の誇る高速戦艦であつた。

それ故に、當時次の如き發表となつたのである。

十二月十日午後四時五分、帝國海軍は開戦劈頭より英國東洋艦隊、特にその主力艦二隻の動靜を注視しありたるところ、昨九日午後、帝國海軍潜水艦は敵主力艦の出動を發見、爾後帝國海軍航空部隊と緊密なる協力の下に搜索中、本十日午前十一時半マレー半島東岸クワンタン沖において、再びわが潜水艦これを確認せるをもつて、帝國海軍航空部隊は機を逸せず、これに對し勇猛果敢なる攻撃を加へ、午後二時二十九分戦艦レバルスは瞬間にして轟沈し、同時に最新式戦艦プリンス・オブ・ウェールズは忽ち左に大傾斜、暫時遁走せるも、まもなく同二時五十分大爆發を起し遂に沈没せり。こゝに開戦第三日にして、早くも英國東洋艦隊主力は全滅するに至れり。



この英東洋主力艦隊の全滅は、次の如き意義があるのである。

即ち、東太平洋では米海軍勢力、また西南太平洋では英海軍勢力、即ち、米英敵兩海軍勢力の主力を、開戦以來わづかに三日目にして共に全滅せしめ、わが帝國海軍は、いよいよ世界における『無敵海軍』の眞威力をもつて太平洋制海權の完全掌握へと進んでゐるのである。

第一に、航空部隊が主力艦隊との決戦で殊勳をあげたのは、今次の歐洲大戰にドイツ軍が、對英優位にある航空力の猛威を發揮して凱歌をあげた例がたびたびあつたが、今回のやうな驚異的大戰果は、世界戰史にいまだかつてその例をみない赫々たるものである。

第二に、英國海軍は傳統を誇る海軍力の基礎として、つねにその建艦技術の完璧を期し、特にプリンス・オブ・ウェールズ號の場合はその裝備力、防

禦力の兩つながら近代科學の粹を集中して建造したもので、かやうな鋼鐵の浮城を一舉に葬り去つた、わが海軍の潜水艦部隊、航空部隊の兼備してゐる「必殺」の精神力、「獨創」の機動力、爆發力の猛威は、まさに凄壯といつてよく、開戦以來わが主力艦部隊の活動は未知であるが、今回の奇襲部隊の活躍は、ハワイ眞珠灣攻撃實施部隊の功績と相並んで、帝國海軍の眞面目を昂揚し、再確認せしめたものと思ふ。

第三に、兩艦の沈没によつて、英國が日本を恫喝牽制する目的から、最近新たに増強編成した東洋艦隊の主力が全滅したことはもちろんであるが、ウェールズ號は同艦隊の旗艦であるから、司令長官トマス・フィリップス大將以下司令部が、艦と運命を共にしたために、太平洋における英海軍の殘餘勢力は、主を失つた捨小舟的漂泊にあへぐ他はなくなつたのである。



米英海軍の苦惱

イギリスは海洋國民であるから、ダンケルクで陸軍が大敗をしてもそれほど悲觀しなかつたが、フッドがビスマルクに撃沈された時には非常に悲觀し動搖したのである。彼等はずっとも精銳をすぐつて海軍に集めてゐる。さうして海軍に信賴し、期待してゐる。海軍の護りが固ければイギリスは決して滅びずといふ信念をもつてゐたのである。その海軍に對する信賴がフッドの撃沈によつてぐらつきだした。

不沈戦闘艦と誇稱した、プリンス・オブ・ウェールズにフイリツプス長官を乗せて東洋の方に来て、今まで支那艦隊といつてをつたのを、地中海艦隊

印度洋艦隊と同格にし、東洋艦隊と呼稱するやうになつたのである。

これは、彼等が如何に東洋方面を重視し、さうして有力なる艦隊をもつて來て日本の發展を妨害しようとしてゐたかを如實に物語つてゐるのである。この不沈なるべき戦艦が、わが航空部隊の攻撃によつて、物の三十分足らずに沈没してしまつたのだから、イギリス國民のうけた衝動といふものは、計り難いほど大きなものであつたに違ひない。これは、恐らくイギリスが始まつて以來の大衝動ではなかつたかと考へられる。

空襲を受けてもあまり驚かないロンドン人であり、陸軍が全滅しても驚かないイギリス人であるが、フッドでうけた打撃以上の一大痛棒を、わが海軍のために喫したことであらう。

このことは、英國の朝野に大衝動を與へて、遂にチャーチルをして、

一、緒戦大戦果の真相



「艦隊の作戦方針を全部變へなければならぬ」

と、叫ばせ、「更に今後は海戦の勝敗を決するものは海上兵力だけではなくして、それに随伴する航空部隊に依る所が多い」とまで言はせてゐる。今後イギリスの艦隊編成は非常に變はるであらうことは疑ひなき事實である。

その一例として、今までは空軍の一部を以て海軍航空部隊を作つて居つたのを、今度は獨立した海軍航空部隊として非常に増強するのではないかと豫想される。

今一つあの海戦の影響として起つたことは、これはもつとずつと將來に起るだらうと豫想してゐた米英艦隊の合作といふことにチャーチルが本腰になつて乗出し始めたことである。

一方、ハワイ海戦について云ふと、この海戦を目撃したアメリカ人の報告

及び居残りの水兵の報告などを綜合して我々が感じたことは、彼等が如何に今までの日本の航空能力を下算しをつたか、又いかに日本の海軍力を下算して居つたかといふことである。

ところが、今度は逆に日本の航空能力といふものが絶對のものであるといふことを彼等は感じ始めた。

殊にチャーチルも言ふ如く、「日本の飛行機はその機體そのものをもつて、わが艦隊へ突つ込んで來た。」とあるのであるから、如何にその襲撃が猛烈であり、又必死のものであつたといふことが目に見えるやうである。爆彈の如きも、殆んど無駄弾なしに全部當つたと水兵は言つてゐる。魚雷を抱いた儘、上甲板にぶつかつて來たといふことを報じてゐる新聞記者もゐる。

かくして米英は、兩海戦に於てその旗艦を失ひ、さらに提督を失つたので



ある。

この敗戦のために蒙つた大きな影響は、

- (一) 太平洋を彼等が安心して通れないといふ状態に入つたといふこと。
- (二) 従つて支那の援助も出来ないといふこと、即ち蔣政権は絶対孤立となつたこと。

(三) ハワイ及びシンガポールの二大海軍根據地がすでに安全なる根據地でなくなつたといふことである。

これは根據地といふものの價値を過大評價しつゝあつたイギリスやアメリカから言へば、非常に大きな打撃であらうと信ずる。

日本では根據地といふものはたゞ艦隊が補給をし、休養をし、修繕をするだけのものであつて、これにそんな大きな價値をつけてゐなかつた。ところ

が英米に於ては根據地といふものが非常に偉大な力を持つてゐるやうに考へて、その根據地を強化することを今まで専らやつてを、艦隊の力よりもつと大きく根據地の力を評價してゐたといふことが、大きな誤りであつたといふことを今頃になつて氣づいたのである。

### 海軍氣質の相違

アメリカとイギリスの海軍の比較については、我が軍が上海にゐる軍艦に降伏の勸告をしたところ、アメリカ海軍の砲艦は直ぐに降伏したけれども、イギリスの砲艦は、「ノオ」と敢然に言ひ切つてこれを拒絶し、忽ち我が砲火の下に撃沈されてしまつた。この氣概からも、アメリカ海軍とイギリス海



軍との相違が感ぜられるのである。アメリカは、海軍がなくてもなにも困らない國である。自給自足が出来る國である。ただ彼等は侵略し膨脹し、又、よりよき生活を樂しむために海軍を使はうとして、政略的に使はうとするために必要なものと考へてゐたところが、日本は勿論、イギリスでも海軍は絶對に、必要なものである。従つてイギリス國民の海軍に對する氣持と、アメリカ國民の海軍に對する氣持とそこに於いて格段の相違がある。

又、それだけイギリス海軍に於ては、海軍に最も優秀なる者が入つてゐるし、造船技術に於ても造兵技術に於ても、可なり優れたものがあると想像されるのである。随つて海軍能力を比べても、イギリスの方がアメリカよりも、一層優秀な海軍といへるのである。

しかし日本海軍との差はどうかといへば、何も比較するにも及ばない。明

明白々にマレー沖海戦に於て、その差を世界に表示したのであるから、言を俟たない。

では、何故にかくも輝しき戦果をあげ得たか？この蔭には實に二十年の長きにわたる帝國海軍の忍苦の訓練が秘められてゐたのである。それに先だつて日米兩海軍の比較を試みるならば、ハワイ海戦によつて、アメリカ艦隊はルーズヴェルト並びにその一派の政略の具に供されたことが、白日の下にさらされたのである。彼等は机上のプランのみを唯大きくして、世界を威嚇してゐただけであつた。

その乗つてゐる兵隊達は、世界を無料で見物しようと思ふものは海軍に入られ、といふ募集につられて入つて來た兵隊である。さきに、ゼームス號が撃沈されて、水兵が百二十名程戦死して以來、海軍の應募率がそれまでは一萬



五千名あつたものが、六千名に低下してしまつたといふ事實がこれをよく示してゐる。

彼等は「よりよき楽しい生活」を營みたいのであるから、命を的に國防に當るなどといふ考へは毛頭もつてはをらぬ。

これに反して日本では、開戦以來急激に志願者が、殺到して來たのである。帝國海軍の將兵は誓つて「國家のために、死ぬこと」を知つて、喜んで志願し來るものである。

訓練も、彼等は全體に於て月曜か火曜に出て、金曜日に歸つて來る有様で、その間も夜は必ず休む時と考へてゐる程の悠長さであつた。

### わが忍苦二十年、無休の猛訓練

これに對して日本の海軍はどうかといふと、眞に敵を撃滅し、國防を全ふするといふことを目標にした艦隊である。従つてその訓練も大變に違つてゐる。ワシントン條約によつて彼等は自分が必ず敗けない、さうして日本は敵に必ず勝てないといふ比率として五・五・三の比率を押しつけたのである。しかし、彼等はこの五の數に對して掛算もなにもしなかつた。この時より日本は條約外である飛行機をプラスし、更にこれに掛ける精神力、及び實力を蓄へ始めたのである。その結果、劣率の三は、絶對の五よりもずつと強率に變じて來たのである。爾來わが訓練は實に土曜も日曜もない。



月月火水木金、といふ世界に比類なき曜日を發明し、訓練に次ぐ訓練を重ねたのである。夜になれば、さあ我々の本當の訓練が今から始まるのだ、と云つて、晝の訓練が済むと又夜の訓練を始めた。従つて平時に於ける犠牲者の數も非常に大きな數字に上つたことは當然である。

この所謂、猛訓練とはどんなものであつたか。

海軍の將兵は口をそろへて、「かう訓練が烈しくては一層戦争が始まつた方がまだ樂である」といつてゐた。何故ならば、實戰であれば、劈頭敵を叩き潰しておけば、訓練の場合のごとく、休養の寸時もないほど次の敵が現はれる筈がないからである。ところが訓練においては、一つの假裝敵を撃滅すれば、他の假裝敵が襲撃し來る。之を斥ければ第三の假裝敵に攻撃される、といふ實に不眠不休の訓練であつたのである。

前にも述べたやうに、紅顔の少年航空兵は、一年の訓練ののち、見違へるほどの戰鬥力旺盛の荒鷲になり「われらは喜んで死んで行く」と叫ぶ。そして、また一年の訓練を経れば、今度は「敵を倒すまでは斷じて死せず」と叫ぶ。

この信念こそ、始めの「喜んで死ぬ」といふ精神より積極性をプラスした崇高莊嚴なる吾が攻撃精神であり、これあつてこそ、マレー沖海戰において數萬發の彈幕の中へ莞爾として突入、ある者は、そのときにすでに肉體は死したる者ありとても、未だ敵健在なるうちは斷じて精神は死なずと、爆彈を抱いて敵艦に突入したのである。さればかへつて死中に生を得て、還らざるもの僅か三機といふ輕微な損害ですんだのである。

しかし、今日その二十年の忍苦の訓練の結果がかくも美しい實を結んだの



であるから、彼等犠牲者も大いに瞑目出来たことと信ずる。この艦隊の根本的な性格の相違、訓練の懸隔それに加ふる精神力、實力の差、それを一丸にして考へれば、そこに自ら今日の結果が何も偶然でなかつたとふいことが、はつきりと認識されるのである。

實に昭和十六年十二月八日および十日に、この大勝を得たことは、二十年來の訓練そのものが、たゞその日にあの實を結んだに過ぎないのである。

こゝに、どうしても見逃してはならぬことは、五・五・三の比率を押しつけられた時に、八八艦隊の達成に邁進してゐた我々は、涙を呑み、當時列強の驚異であつた、四萬噸級の紀伊、尾張などの軍艦を、わが手によつて、撃ち沈めたのであつた。その時から、直ちに寡を以て衆敵に當るといふ方策を考へ始めたのである。それは何よりも第一に兵器に力を傾倒しなければなら

ない。その中には軍艦も飛行機も大砲も、水雷も皆含めてであるが、その全體の質を非常にたかめて行つた。

どの軍艦一隻を見ても、他國のどの軍艦よりも必ず優れてゐる。どの水雷一つを持つて來ても、他の水雷よりも優れてゐる。飛行機の一臺についても亦同様で、かういふ風に各單位毎に非常に優れたものを造らうとし、そのためには晝夜も分たず研鑽をつゞけ、海軍の技術官達が實に精魂を打込んだのである。しかし、學術の發達は一朝一夕には出來ない。多年の努力を要することほもちろんである。

建艦については、帝國海軍創設以來の傳統精神は、建艦の獨立であり、獨創的威力である長門、陸奥の建造にあつては、前大戦における英獨海戦の結果をとりいれ、それに日本的な獨創を加へて設計された。これが十六イン



チ砲を持つ世界最初の戦艦となつた。さらに加賀、土佐、赤城、紀伊、尾張などの設計はいよ／＼日本獨得のものとなつた。そのころ恰も八八艦隊の主力艦が段々大きくなる傾向にあり、紀伊、尾張の如きは實に四萬二千トンを越えるに至つたのである。

しかし主力艦は大きくなる一方に物價はいよ／＼騰貴するので、建造費も高くなる一方であつた。當時加藤海相、岡田艦政本部長等のもつて、一同は建艦費の節限といふことに骨を折つたものである。

かくて五千五百トン輕巡に代ふるに三千百トンの小型ながら、同じ力を持つ新艦型の建造に成功したのである。

世界の造船界を騒がした夕張がそれであつた。

そのころ二十センチ砲を積む巡洋艦は、一萬トン以上でなければならぬと

いふ考へ方が、世界の造船界を支配してゐた。そこで二十センチ砲を積み、しかも排水量は一萬トン以下、いひかへれば製艦費の安いものを作つて、在來の十五センチ、または十四センチ砲をもつた巡洋艦を「けたはづれ」のものにしてしまはふといふ苦心があつたのだ。

かくて古鷹級が、世界最初の近代的巡洋艦となつたのである。

外國の新聞や雜誌には、これらの船が海で動搖し易く、かつ弱いであらうと書きたてたものである。

ところが事實は海にも強く、動搖も振動も少ないものであつたことは事實が證明するとほりである。

では、これらの不可能とされたことが、どうして可能となつたか。それは眞心である。誠心誠意である。そこに技術を超越した技術が生れた。誠心誠



意で作り上げたものは、物であつて物ではない。日本精神がそれに乗り移つてゐるのである。これこそ二十年の勝利といふものに絶對に見逃されぬ大きな結晶の賜物である。

さらに、用兵家の立場としては、これに對してこの優れた兵器、艦船を、最もよく使ひこなす方法を工夫したものである。

この間に於て我々が一番大事な教訓としたものは、東郷元帥の言はれた「一發必中の砲一門は、百發一中の砲百門に匹敵する」

——この言葉である。それが我々が、寡を以て衆にうち勝つ根本原因となつたのである。

### 帝國海軍獨特の必殺戦法

私の云ふ必殺戦法といふものは我が海軍獨特のものであつて、アメリカもイギリスでも、いかなるものか、躍起となつてこれを探らうとしてゐる。

その一端の現れは、ハワイ海戦や又マレー沖海戦に於て行つたところの所謂體當りに近い必死必殺の突撃戦法なのである。見敵は必ず斃さは已まずの精神である。

ハワイ海戦にあつて、我が攻撃隊の苦心したのは、その攻撃全體の戦果を最大に發揮せんとして當時十七米突の強風の方向を考慮したことである。

即ち先づ魚雷攻撃から始め、それも最も風下にある戦艦から逐次風上に及ぼし、次に急降下爆撃、最後に最も發煙量の多い大爆弾による水平爆撃へと移つて行つた。その間敵の航空基地を叩いた飛行機群の銃爆撃も同様に、風上へと炎焼せしめ、その沈着なることは、全般からみて感じられることは、



敵弾も何も来ない運動場で、爆撃訓練をしてゐると何等異らない氣持であり、その襲撃の間に、寫真や映畫の撮影も行つてゐるのである。その爲に、敵弾の被害を受けざる機なしと云はれてゐる。

さらに、マレー沖海戦にあつて、プリンス・オブ・ウェールズの如きは、機關銃四十八門、高角砲十六門、それに十四インチの主砲十門も加へて、全能力を發揮し、日本の航空部隊撃退に焦り、さうしてそれだけの武器があれば、必ず敵の攻撃部隊を撃滅し得ると信じてゐたのである。ところがそれらを持つてしても、どうしても防げぬ程の猛烈果敢な捨身の戦法を使つたといふところに成功の原因があつたのである。チャーチル英首相は、議會に於て日本海軍航空部隊は、實に機體そのものを以て、わが急所に飛び込みりと沈痛な報告を行つたのは、この爲である。

ともあれかゝる沈着、豪膽な、しかも勇猛果敢な攻撃は、普通の訓練や教育では出来るものではない。

「敵を倒すまでは死んではならぬ。」と紅い頬を緊張させて一分間何萬發と降り注ぐ彈幕の中へ突入して行つた彼等である。前にも述べたごとく、この時既にその翼は傷き、或ひはその身も敵弾に射ち貫かれてゐたかも知れない。しかし、唯「敵を倒すまでは死んではならぬ」との一念が凝つて、魂だけで突撃して、あの大戰果を生んだのであらう。「死ぬ」ことは容易である。しかし、「敵を倒すまでは死んではならぬ」と云ふこの精神！崇高といふべきか、また莊嚴と云ふべきか、ともかく大和民族にして、初めてなし得るものである。そこに、我々は日本民族の「強さ」「偉大」さがあ



また、水中から特別攻撃隊に参加した勇士達は、出發前に「必勝」「成功」「敵を倒す」の文字言葉はしばしば用ひてゐるが、「決死」「生還」「生死」「生命」と云ふが如き文字は全く使つてゐないのであつて、この部隊を「特別攻撃隊」と名づけ、決死隊といふ呼稱を使はなかつた所以もこゝにある位、總ての乗員は、生死を遙かに超越して、祖國の爲に戦つたのである。

だから必殺必死、即ちこつちが先づ必ず死ぬのだといふ捨身の戦法こそがこの大戦果を齎したもので、これが嘗て、私が、海軍記念日に「我に必殺の戦法あり」と叫んだ所以である。

これだけが、我が必殺戦法のすべてではない。まだまだ今後は各部隊毎に持つてゐる獨特の必殺の戦法がある筈であるが、それは將來だん／＼現はれて来るから、その時を期して待たれたいと思ふ。

## 二、米英今後の作戦

### 米英艦隊の合同作戦

マレー沖海戦で大敗北を喫した英國は、直ちにエヂンバラといふ一萬トンの巡洋艦を回航せしめると発表した。これは八インチ砲を八九門を持つてゐる普通の巡洋艦にすぎない。到底プリンス・オブ・ウェールズの比較にはならぬものである。この發表について考へても、大きい戦艦を持つて來ないところに面白味があつて、恐らくはこれによつて残存兵力を總めてその指揮



下に入れ、だん／＼と後退する戦法ではないかと考へられるのである。

米英艦隊の合作行動はどうか。これは、その結果が日本にどう響くかといふことは、勿論非常に大事なことなのであり、注視すべき所である。今、イギリス艦隊そのもので日本に立向ふ氣力はないし、又アメリカ艦隊は獨力で日本と戦ふ元氣もない。日本の海軍の存在する限り、彼等は來れば益々餌食になるの感が深いばかり、そこでアメリカは、どの位の勢力になるかは分らないが、主力艦とこれに附隨する艦艇とを東洋方面に派遣し、いま日本が行つてゐる自由行動を牽制しなければならぬ。しかし一國だけでは、心細いので、英米が合體する。さらに濠洲も蘭印も全部合するといふことになつた。しかし、かゝる間に合はせの聯合艦隊は、強力を發揮することは出来なない。アメリカの主力艦の概説は、後で述べるが、ハワイ海戦で損害を受けざ

る他の戦艦は、約八隻、イギリスは、大體十一隻位であるが、最近の情報によれば、地中海その他に於て、獨伊の奇襲攻撃を受けて、その中の一二隻は損傷を蒙つたもののやうであるが、全部集めても、二十隻にはならない。これでは、日本海軍とは、五對三となる。

比率より見ればやゝ勝つてゐるが、攻撃精神の優劣は、前の二海戦で、獨伊介ずみである。さらに、これら全部を太平洋に回航させておくことは、獨伊の海軍の危険に曝される心配があるから、絶対に出來ないことである。

と云つて、ハワイにあつた米太平洋主力艦を復活するには、いくら建艦を急いでも三年かゝらねば、完全にはならない。ましてや、受けた兵員の損傷の恢復するのは、もつと長い期間を要することは、自明の理である。

ともかく、英米は遂に西太平洋に三軍を統一提携するに決し、米海軍のハ



トト大將をその海軍最高指揮官に任命、最後の抵抗を圖るか、國民の非難への申譯にするか、いづれにせよ、何事かをなさねばならぬ羽目に陥入つてゐるやうである。

そこで、米英兩艦隊合作の力に依つて日本に挑みかゝるといふことになれば、非常に理窟が合ふのである。しかし、それが却つて日本の艦隊をして非常に喜ばしめる好材料になるし、短期にして敵を撃滅しうる確信のもとに立つ帝國海軍としては實に願つてもない敵の行動である。

さうなれば、長期戦を覺悟してゐる帝國としては、この戦争を一舉に勝利に導き得る最良の方法を考案してくれたチャーチル英首相に感謝狀を贈らねばならないことになるであらう。

### 星港陥落と新日本海

この地球上に、日の没することなきを誇つた老大英國が、東洋に於ける金城湯池とも恃んだシンガポールも、我が海陸の精銳の前に懾伏した。

既に香港は、開戦十餘日で降服したが、先づ香港の重要性は、こゝをイギリスが、百年に涉つて、東洋搾取の策源地として、その最盛を誇つてゐただけに、その策源地の覆滅は、すこぶる意義が深いものである。

何がそこに残されてゐたかと云ふと、夥しい鹵獲品その他が計上されやうが、それよりもつと意義深いことは、イギリスが東洋に於いて行つて來たあらゆる策謀——ことに支那事變を長期化せんとする蔣介石援助の根源地であつた。そこを根本的に覆滅し切つて、明瞭化したことは、意義深い。とくに、これからは、日本の援助のもとに東洋人



のための東洋にする意義が根源として残ることになる。

物質的に見れば、香港が陥落以前まで、暗に行つてゐた經濟的の謀略とか、物資を重慶側へ運搬する據點であり、密輸の根據地であり、又は重慶政權側から他國へ出入する要人連中の足場であつたりしたものが、根本的に消滅されてしまつたことである。

この香港は、嘗てイギリスが、このやうに利用してゐたのと、別の意味に於て、日本が之をよく利用しなければならぬものであることを念頭におかなくてはならない。

マニラの陥落は、これとやゝ近くしかし多少の相違がある。

大體アメリカは、嘗てフィリッピンを占有したことは占有したもの、必ずしも、比島より良い結果ばかりは、齎されなかつた。

例へば、比島の農業が發達すると、その作物がどんどんアメリカへ入荷される。すると、フィリッピンで出来る農産物は、殆んどアメリカと同じものであるから、それが、どんどん入るといふことになる、アメリカ農民は非常に困る事になる。そこで農民を

代表する代議士達は、盛んに比島を獨立させたがつてゐたのである。

即ち比島獨立は、フィリッピンに恩恵を興へ、優遇するために出發したのではなくして、むしろアメリカの農民を困らせない爲に計畫されたのである。

自分の領土であれば、アメリカとして、フィリッピンのもを買はない譯には行かない。買はなければフィリッピンの農民が困る。と云つて、これを助けると、今度はアメリカの農民が困つて来る。さう云ふチレンマ的な狀況から遁れるために、比島を獨立させるといふ事になつてゐた譯である。

尙これを、持ち続けるとすると、アメリカとしては、到底堪え切れないほどの軍力を要する。現在までアメリカとしてはそれは、うまく行つてゐなかつたのである。その證據は今次の戦端開始と同時に、敵軍の崩壊の早さでも窺はれるであらう。今までその爲に、アメリカは、大きな負擔を拂はねばならなかつたし、しかし、特にそこから大きな利益を得てゐない。たゞアメリカとしては、東洋方面を制壓する政治力の足場として利



用してゐたのであり、そこに、マニラの持つ意義が非常に大きかつた。

戦前マニラを根據地としてゐた、米東洋艦隊は、その政治力の基礎として來てゐた譯であつた。

そのマニラが覆滅してしまつたのである。しかも、東洋艦隊は、開戦直前に錨をぬいて出港した儘、いづこへ赴いたのか、分らない始末であるから、即ち東洋方面を制壓する彼の政治力といふものは、開戦と同時に自ら失つてしまつたと同じことになる。

そして、この海軍力は、わが作戦海面には見當らない。その證據には、何千哩の距離にある我が國より、わが陸軍部隊が、陸續として、比島上陸を敢行し、規模雄大な作戦を進行してゐるのにも拘らず、この海上途中で、何等の抵抗も損傷も受けてゐない事である。これは、米東洋艦隊が、少しも活躍してゐないことになる。従つてマニラは陥落せられる以前から、既に陥落する状態になつてゐた譯である。

アメリカは、それ程に實力を持つてゐないと云はれるのである。彼等は空の元氣で憫

喝的宣傳力の、僞瞞したる力で、わが東洋を抑へんとしたのである。そして、自分としては抑へたつもりでゐた。豈計らんや、實力のみが物を云ふ戦争となると、それがはつきりと分つて來たのである。

さて、次に、シンガポールの陥落であるが、シンガポールこそは、イギリスが香港を失つても死守しなければならぬ東洋の政治の根據地であつた。

シンガポールを制するものは、蘭印、濠洲を含む西南太平洋を抑へ、さらに印度へも力を及ぼすことのできる重要な據點である。

かく、星港を失つた後のイギリスは、西部太平洋より全面的に總退却をしなければならぬ。それだけでは済まされず、印度洋が危険にさらされる事と思はねばならない。

イギリスは、東洋方面の足場として、最後にたのむインドに於ても、コロンボは、必ずしも安全でないことが分れば、勢ひボンベイまで一舉に下がつて、今後の策を講ずるより方法がないであらう。



このやうに、英米は、後退しつゝある一面、我が方は、どうかと云へば、開戦當時米國の沿岸にあつた數隻の弱き日本商船でさへ、戦時下の太平洋數千哩の怒濤を乗り切つて、無事歸國してゐるのである。これは、何を意味するかと云へば、云ふまでもなく太平洋の制海權は今や完全に我が手にあり、と云ふも過言ではないと信ずるものである。

ハワイ海戦、マレー沖海戦、さらに進んで香港、マニラ、シンガポールを失つたとき、米英の行手は、如何になるであらうか。榮華を誇つたカルタゴは、その海軍がローマに敗るゝ日より衰亡の影を現はし始め、スペインは、その無敵艦隊が敗退してより衰へ始めた戦争の天才ナポレオンさへ、その艦隊が、ネルソンの一撃を受けてよりまた起つた日を見なかつたのである。

米英の衰滅を豫告するものでないか誰が斷言出来ようか。

しかも、帝國海軍は、かゝる廣大な海域に世界戦史に比類なき雄渾無類の大作戦を取

行しながら、些かの疲れをも見せてゐない。否むしろいよいよその底力を加へつゝあるのである。

現在我が海軍の作戦區域は、東は米本國海岸より、西は印度洋に及ぶ東西一萬マイル、實に地球の半周に近からんとし、北はアリューシャン群島より、南は赤道を越えて更に南溫帶圈に至る南北五千マイルの海域に亘つてゐる。これは人類が戰場として想定し得た最大のものではあるまいかと思ふ。

尙帝國艦隊の實力を以てすれば、必要とあればなほ數千哩の作戦區域の擴張も可能であつて、太平洋、印度洋の全海面を制して新日本海と稱する日が來ないと誰が斷言出来ようか。

### 蘭印の膺懲と濠洲の動向



蘭印は虎の威をかりる狐の如く、虚勢を張つて我に拮抗せんと試みてゐたが遂に膺懲の火蓋は切られた。二千五百海里に及ぶ南海の怒濤を制し、タラカン島、セレベス島メナドを直ちに制壓したのである。

彼等が今まで頼りに頼つてゐたのは、イギリスや、アメリカの海軍力であり、これがいざといふ場合に、協力して助けて呉れると考へてゐたやうである。しかし、頼りの網たるイギリスの主力は撃滅され、アメリカの主力もまた殆んど全滅に近い状態に陥つたのであるから、蘭印はすでに孤立無援にの立場におかれてゐたのである。

かういふ状態にありながら、なほ日本に對して反抗するといふことは、その結果が一體どういふ運命を辿るか、今までイギリスの甘言に乗せられて滅びて行つたユーゴースラビヤや、チエッコとか、ギリシヤなどの例を少し

く考へれば、一目瞭然であつたであらう。かく考へれば、この轍を踏むことなく、泰國の先例に倣つて、日本と和平のうちで共榮を樂しむといふことが、賢明なる政治家の執るべき道であつたと信ずる。しかし、今となつては、蘭印の艦隊の如きは、鎧袖一觸である。同海域のオランダ軍艦一隻は直に撃沈され、敵潜水艦、敵船も同様の運命に見舞はれたのは當然のことである。

濠洲についても、略々同様の事が云はれよう。

濠洲自身も、この邊で見極めをつけて、態度を變へるべきであらう。シンガポールが、我が手に陥ちた後は、濠洲は歐洲より遮斷される。彼等は早く日本の實力を認識しない限り、まずく損をする事になる。もし濠洲に賢明な政治家があるならば、日本の東亞新秩序建設に協力の態度に出て來て然るべきだと思ふ。



敵潜水艦のゲリラ行動

敵の潜水艦はどうしてゐるか？ マニラに二十隻ほどひそんでゐたのは、あちらこちらへ脱走し潜つたりしてその所在が分からなくなつた。

緒戦においてその中一隻はバラオ沖で沈められ、また他の一隻はマニラ灣で拿獲されたが、その後の索敵攻撃により現在までに十數隻を撃沈、その他不確實なるもの多數あり、これは潜水艦は水中に潜つてゐるものであるから、その沈没を明確に認めることが困難な爲であるが、その殆んど全部がすでに掃蕩せられたことは確かであつて、このことについては、何よりもアメリカ自身が一番よく知つてゐる筈である。彼等にとつて、歸らうとおもつても、

その根據地は既に日本に占領されてゐる。強いて歸らうとすれば、米本國に歸へるより他に道がなかつたのである。だが、彼等が本當に最後までやるといふ氣になれば、多少は日本の輸送船なり、或ひは日本の艦艇なりに危害を加へることが出来たかも知れなかつたのであるが、それが到底日本に致命傷を與へるものでないことは彼等と雖もよく知つてゐる筈である。たゞ、あとから、どれだけ潜水艦を派遣して來るかが残された問題であらう。

しかも、この航空母艦中の最強レキシントンの腹底を狙ひ、魚雷を命中撃沈せしめた我が潜水艦戦闘員の殊勳は、マレー沖海戦の航空部隊の殊勳と共に特筆すべきものである。

現在のところ、彼等としては、日本の近海を窺ひに出動し得る潜水艦は、全然なしとはしないが、種々の點を綜合して判断するに、さう多くはあり得



ないことである。

従つて、日米戦争開始せば、その潜水艦による通商破壊によつて、日本を經濟封鎖すると傲語した事は、空言と化し去つたのである。しかし、敵潜水艦による被害が全然ないと安心してはならないのである。伊豆沖に於て、わが商船一隻が損傷を受け、さらに人道を辨へぬ彼等は、南支那海に於て、國際法上禁じられてある病院船を攻撃し來たことである。

これに對して、わが潜水艦はいかなる活躍をしてゐるかと言へば、むしろ、米本土を逆封鎖の状況においてゐる。

わが潜水艦は、敵のごとくに武装せざる船舶のみをねらつてをらない。むしろ、果敢に敵主力艦を攻撃せんとしてゐる。その現はれば、去る一月八日、比島を脱出して遊弋せる米水上機母艦ラングレーをジョンストン島西沖にて

撃沈し、その殊勳の噂消えやらぬうちに、さらに、太平洋を西航して、われに反撃を加へんとして現はれた米海軍が世界最強大航空母艦として誇るレキシントン、ハワイ西方洋上において、完全に魚雷を命中せしめ、二大轟音とともに、海底の藻屑と化さしめたのである。

かくて、開戦以來一月十日迄の緒戦後一ヶ月の綜合戦果は、帝國海軍による撃沈拿捕實に百九隻、卅六萬二千トンに及び、第二次歐洲大戰において、ドイツが撃沈した英船舶月平均卅萬トンを凌駕する數字をあげ、米英は逆封鎖に戦慄してゐる次第である。

### わが本土空襲を狙ふ

彼のゲリラ戦による經濟封鎖が、このやうに効果薄いのとは別に、彼が、



日本が警戒してゐる空襲の可能性は、今のところその航空母艦の活躍による他はないであらう。

わが本土を狙ひ得る航空母艦は、わが潜水艦のため撃沈されたレキシントンと残るサラトガとは同型であり、排水量は三萬三千噸で、現在においては米國のみならず世界最大の航空母艦である。この型は速力三十四節といふ高速であつて、飛行機は八十機乃至九十機搭載されてゐるといはれてゐる。備砲は八吋砲八門、五吋高角砲十二門、大型機銃八門であり、カタバルトを基備へてゐる。

次にエンタープライズはヨークタウンと同型で排水量は一萬九千九百噸、速力三十四節と公表されてゐる。これは新型であつて搭載機数は八十機と見られるが、最大百機迄搭載しうるといはれてゐる。備砲は五吋高角砲八門、

大型機銃が十六門、小型機銃が十六門で、新らしいだけに對空防禦には相當の力をもつてゐる。この二隻は一九三八年の竣工であり、この同型艦に一九三九年進水したホーネットといふのがあつたが、これは本年竣工する豫定になつてゐる。

この外にレンヂャーといふのとワズプといふ二隻がある。レンヂャーは排水量一萬四千五百噸であつて、速力は二十九節半といはれてゐる。搭載機數七十二機、備砲は五吋高角砲八門、機銃四十門を搭載、これは一九三四年の竣工である。

ワズプは排水量一萬四千七百噸で速力は三十節と推定される。これは一昨年四月に竣工した最新のもので飛行機は七十二機といはれてゐる。備砲は五吋高角砲八門、機銃四十門である。



なほ昨年建造に着手したものに、エセックス、ボンホームリチャード、イントレピッド、カーサージの四隻あり、次に七隻の建造計畫であるやうだ。今回の海戦において、劈頭の二隻に太平洋艦隊は脆くも全滅したのであるが、航空母艦は一隻を失つたのみで、残る四、五隻は健在である筈であるから、彼としてはこれを活躍せしめて、何とか仇をとらうと考へてゐることと思ふ。かく見る時、彼がこれをもつて海上から日本の要地を空襲せんとも限らないのである。

潜水艦の訓練は言語に絶するものといつても過言ではない。まづ精神的、肉體的方面をみても、病人が酸素吸入をやるときは危いときであるが、こゝではそれが毎日である。根據地にある間は肉もあり、野菜もあらうが、出港したが最後、食物は罐詰か乾燥野菜ばかり、空気が汚れるのでタバコも吸へ

ぬ。便所も一つしかなく、順番を待つのがまた一苦勞である。たまに青空を仰がうと艦上に出れば、まごつくすると波にさらはれる、時化にあつてバランスをなくした時の苦しきなども口には云へぬものである。からだは宙に浮いてその胸苦しき、しかも敵を仕止めるには大變な努力と忍耐を要するのである。一度潜航すれば蟲の匂ふやうなもので、どんなに腕を磨いて待つても自分の手の届くところに敵艦が近づかねば何にもならぬ。それを待つ辛抱がまた容易ならぬものである。

やつとの思ひで敵艦に近づき、魚雷を發射するのが普通だが、ペリスコープがのぞいてゐると、驅逐艦、巡洋艦が高速力で飛んできてぶつつけられる。また爆雷もふり撒かれる。敵の領分で水上に出たり、浅いところで、まごまごしてをれば飛行機の餌食になつてしまふのである。だから、敵潜水艦も迂



潤には、こちらへ近寄れないのはこの爲である。

敵味方を問はず、潜水艦にとつて何よりも大事なことは急速に、二分間以内で百フィートももぐることである。これがなか／＼むづがしく、ベント（空気抜）をひらいて海水が恐ろしい音を立て、入つてくるのと共に、艦橋にゐたものが艦内にもぐりこみマンホールの蓋をしめるのである。おくれたら沈没する。かの成瀬兵曹の尊い殉職事件も、この間の猛訓練を物語るものであるのだ。また肝腎の魚雷発射は公算発射といつて放射状にうつ射ち方もあるが。日本のやり方はあくまで踏みこんで敵と差しちがへる戦術である。ただ、餘り近よると發射した魚雷が、自分の重味で深くもぐつたまゝ敵艦の底を通過してしまふ、數百メートルの間隔がちやうど適當である。しかも、この場合敵は高速力でチグザグに走つてゐるのだから、一瞬にどこへ位置す

るかになか／＼苦心のいるところである。

我が潜水艦の乗組員こそは、椽の下の力持の一語に盡きるのである。いま太平洋の海底には、言語に絶する勞苦を忍びながら、この椽の下の力持に甘んじ、敵を逆封鎖し、主力艦を撃沈したりしてゐる。これは功名心ではなく陛下の醜の御楯として、また帝國海軍の潜水艦乗組員として、人が見てゐようがゐまいが、最後まで自己の本分をつくすといふ氣持である。

さういふ崇高な信念からくるものでなくて本當の仕事など出来るものではない。前大戦で、イギリスの潜水艦がダーダネルスを抜けて、黒海に潜入したり、こんどの大戦でドイツのプリン少佐のUボートが、スカパフロー軍港に突入してローヤルオークを撃沈したりしてゐるが、これらはたまに一隻か二隻のもので、ハワイ海戦のやうに五隻いまだ還らずに比すべきものはない。



また、一方米國潜水艦の航續力といふものは、非常に大きく、近い所に根據地を持たなくても行動は出来得るのであるが、しかし、ドイツ軍やイタリア軍がやつてゐる、あゝいふ華やかな通商破壊戦といふものはわが海軍の健在する限り、到底出来ぬ。

近代の長期戦においては、海上ゲリラ戦は當然起り得るのであつて、われわれは勿論それを初めから豫想してゐるのであるから、國民においてもこれは承知して置いて貰はねばならぬことである。

しかし、潜水艦戦術については英米共に餘り上手ではないのである。又、英米は潜水艦に向かない國民性であるとも言ひ得る。だからこそ、今まで軍縮會議において、日獨の潜水艦を恐れて英米は潜水艦の全廢を唱へて來た。潜水艦は、いはゆる持てる國には向かない兵器で、分量を非常に少なく制限

されてゐるものが持つてゐてこそ、非常に強力な武器なのである。それ故、日、獨、伊、は潜水艦の全廢に反對したのであつた。

### 開戦前の米海軍の全貌

翻つて、大東亞戰爭勃發前のアメリカの建艦計畫を見るに、昭和十五年七月二十日成立した所謂「スターク」案は、太平大西兩洋艦隊整備法とも呼ばれ、これが昭和九年提出された第一次ヴァインソン案以後の擴張案と共に全部完成を見るに於ては、實に艦齡内艦艇のみでも三〇五萬噸に達する、空前の大建艦案であつたのである。

從來、兎角に紙上計畫の譏りを免れなかつた米國の造艦計畫が、着々と實



現の域に進みつゝあり、老大な航空軍備の擴張と、人員の充實も併せ考慮しつゝ、進捗の途上にあることは認めざるを得ないとしても更に重要な事は、數次の擴張計畫が日本に對抗せんとする企圖の下に提出されたことは、明白に認識されるのである。

昭和九年の第一次ヴァインソン案が、條約量(一二六萬噸)迄の擴張はまづ當然としても、昭和十三年の第二次ヴァインソン案(條約量の二割増強)が、帝國の國際聯盟脱退と日支事變勃發に對する備へであることは疑ひなき事實である。更に、昨年の第三次ヴァインソン案(第二次ヴァインソン案の一割一分増強)は、今次歐洲大戰勃發に伴ふ歐洲及び極東情勢に對應せんとするものであり、更に七割増強の「スターク」案に至つては、樞軸軍撃破の決意の下に、二正面の同時作戰をも辭せぬ、兩洋艦隊の整備に乘出したものであるこ

とは今日多言を要すまい。この相次ぐ建艦案より見ても、米國の眞意が果して那邊にあつたかは我々の深く肝に銘じてゐた所である。

このうち、第三次ヴァインソン案が、戰艦七隻(一六七、〇〇〇噸)、特務艦噸二二隻(七五、〇〇〇艦)を二年以内に建造せんとし、特に航空母艦の増強に異常な努力を拂つてゐることは注目すべきであつた。

又、「スターク」案が七年間に戰艦七隻増強(一、三二五、〇〇〇艦)補助艦艇(一〇〇、〇〇〇噸)、飛行機(二五、〇〇〇機)、飛行船(四八隻)を整備せんとするに至つては、太平洋上の基地強化と相俟つてその企圖を捕捉するに難くなかつたのである。

この擴張案の建造費は、年度制として一昨年度四八億弗餘、昨年は六一億弗餘が成立済みで、その中に包含されて居り追加豫算もすでに莫大な額に上



つてゐたのである。

その結果、本會計年度に於て建造契約を結んだ各種艦艇は、六九二隻に達し、航空機の發注は約六、〇〇〇機に及んでゐると發表されてゐる。

尙、追加豫算を含めて一三三億弗に達する對英武器貸與法と呼ばれるものも、一見すれば英國援助用と早合點される嫌ひがあるが、實は米國自體の國防促進の有力な一翼をなすものである事を看過する譯に行かないのである。従つて、米國の大軍備計畫がこのために支障を生じ、又は遅延を來すものと速斷するのは早計である。

しかし、この大軍擴が今日完成してゐる譯でもなく、徒に老大な數字の威力に壓倒されることは最も忌むべきことである。

米國の建造進捗狀況は、なるほど米國はたしかに大量生産工業能力の點で、

或る意味に於て世界に冠たるものがあらう。

さりとて、この能力は簡單には兵器生産に轉換し得るものではない。たとへ轉換し得たとしても、特に完成品生産能力は極めて制限されざるを得ないのである。

更に極言すれば、合衆國には前大戰以來より殆んど大規模な軍需工業はなかつたといへるのだ。但しこれは米國が「民主主義國の兵器廠」の資格がないといふことではなく、準備は十分あつたことは卒直に認めてもよい。

たゞ能力發揮の時期が問題である。

果して一昨年末までは、第二次ヴァインソン案の目標とする保有量一五一萬噸（艦齡内）に對して實に四十八萬噸の不足を生ずる状態であつたのであるが、しかし、これは決して安心感の材料にはならないのである。



新設軍需工場が、曲りなりにも大量生産實現の軌道にのつて可なりの成績を擧げ得るに至つたのは、極めて最近のことと認められるが、新工場が操業を開始したのは數ヶ月前——米國が絶對國防の完成に乗出してから約一年後のことであつた。

現在に於ける南洋艦隊建造進捗状況に關しては、昨年初頭以來より竣工した各種艦艇二一三隻、進水したものの二四九隻、起工したものの四三六隻、總計八九八隻の巨大な額に上つてゐる。

これらの數字は勿論萬更根據のないものではなく、米海軍の艦船建造の全貌を示すものであるが、各種艦艇といつてもわれわれの常識の軍艦はその一部に過ぎず、起工といつても、建造契約を結んだものも、或ひは建造中といつても、龍骨据付けを終つたものは勿論、部分品の組立工事中のものも全部

包含してゐて、主として宣傳的、威嚇的、効果を狙つてゐる點に留意の要があり、その真相を辨へず徒に建造の驚くべき急速調と、造艦能力の巨大さに驚愕するやうなことがあれば、正に米國製の數字の魔術にかかつたものといへるのである。

この證據を實例で示せば、米海軍はその艦船を四種に分け、戦列艦、補助艦艇、哨戒艇、雑役船と區別してゐるが、その建造計畫別は次の通りである。

- 一、米海軍艦艇
  - 戦列艦 (軍艦、驅逐艦、潜水艦) 三六〇
  - 補助艦艇 (各種母艦、敷設艦、工作艦等) 一二三
  - 哨戒艇 (驅潜艇、魚雷艇) 一四五
  - 雑役船 (ライター、港務部曳船) 二七〇

二、米英今後の作戦



計八九八

今、戦列艦に就て、その建造進捗状況を見れば、一昨年一月以降竣工せるもの三十隻、本年中に進水のもの三五隻、建造中のもの九〇隻で現有兵力等の内譯は左の通りである。

二、戦列艦建造状況

	竣工	進水	建造中
戦艦	二	三	九
航空母艦	一	一	四
巡洋艦	〇	五	一九
驅逐艦	一四	一五	四五
潜水艦	一二	一一	一三

計

二七

三五

九〇

三、現有兵力（本年中に完成のもの一五隻、艦齡外一七四隻を含む）

戦艦	一七	（五三四、〇〇〇）
巡洋艦	三七	（三三〇、〇〇〇）
航空母艦	六	（一五五、〇〇〇）
驅逐艦	一七〇	（二六四、〇〇〇）
潜水艦	一一〇	（一二三、〇〇〇）
計	三四〇	（一、四一〇、〇〇〇）

四、「スターク」案完成後

七〇六隻 三四八萬噸（内艦齡外一八六隻、四五萬噸）

戦艦

艦

（一一一）

（一、一五八、〇〇〇）

二、米英今後の作戦



航空母艦	(一八)	(五三五、〇〇〇)
巡洋艦	(九八九)	(八九七、〇〇〇)
驅逐艦	(三七四)	(六四八、〇〇〇)
潜水艦	(一九三)	(二四五、〇〇〇)

(備考) 括弧内は艦齡外を示す

右の如く、米國は概ね豫定の線に沿つて、その建艦工程の促進に狂奔しつ  
つあり、戦艦ノース・カロライナの如きは、竣工を數ヶ月繰上げ、驅逐艦の  
建造年月も新記録を立てつつありと傳へられてゐる。

従つて、今後の建艦の實現は多少の困難はあるとしても、先づ順調に進行  
するものと見るのが無難であるが、スターク案は最近更にその完成を二年繰  
上げのことに變更された模様である。竣工した艦でも、就役迄は最小限半年

はかかる。況んや進水した艦がいくらならんだ所で、今すぐ第一線で活躍し  
得るものではない。従つて兩洋作戦は言ふもおろか、太平洋進攻作戦だけで  
も、覺束ない實情であつたので、兩洋艦隊整備に汲々としてゐた所以も實に  
茲にあつたのである。

しかも、我々は徒らに米海軍兵力の増強を拱手傍觀してゐたわけでは勿論  
ないのである。

一方、航空隊の増強方針は、艦船建造の促進と共に、むしろそれ以上に、  
異常の努力を傾注しつゝあつたのである。

海軍はスターク案により一五、〇〇〇機まで、陸軍は決定數はないが、約  
五〇、〇〇〇機に増強せんとする計畫してゐたのである。

飛行機の生産力に於ては、最初は年産五萬機を目標とし、之が實現に向つ

二、米英今後の作戦



て進まんとしたが、各種の障碍しょうがいのために無理がきかず、この計畫は忽ち變更の餘儀なきに至つた。即ち、一九四二年頃までに年産三六、〇〇〇機に漕こぎつけんとしてゐるのである。

航空機の製作能力について、米國は幸か不幸か樂觀らく観的であり過ぎたやうである。戦前は主として米國製の商業機が、世界航空路に就航してゐたことや、大規模な自動車工業技術の適用を以てすれば、ドイツに匹敵ひつてきし得ることは易易たるものであるとの信頼感が可なり強かつたやうであるが、航空機工業は凡ての機材の生産が均衡きんぐんを保つてゐなければ、簡單に行かないことはドイツの十年に亘る準備を見れば明白である。

物事が決して一朝一夕で出来上るものでないことは、たしかに心すべきである。然しながら、製作能力が次第に増強し、近い將來所期の域きやくに達するこ

とは左の數字から見ても、略々確實と見て差支さしつかへないだらう。相手を見纏ることとはこれ亦與せざるところである。

一、年産機數

一九三八年	一、八〇〇機
三九年	二、七〇〇機
四〇年	五、八〇〇機
四一年	一七、〇〇〇機
四二年	三〇、〇〇〇機

(豫想)

二、昨年度月産機數

一月	一、〇三〇
二月	九七〇

二、米英今後の作戦



米英艦隊撃滅

三月……………一、二〇〇  
 四月……………一、四〇〇  
 五、六月……………一、四五〇  
 七月……………一、四六〇  
 八、九月……………一、八五〇

機種の内譯を七月に就て言へば、練習機七〇〇機、残り實用機（内爆撃機三〇〇機）で、長距離爆撃機は五〇機内外であらうと推定される。

海軍の航空兵力は、航空機を昨年まで對英援助に殆んど生産機の半數を割いてゐる關係で、要望通りの數が入手できるか否かは疑問であつたが大體次の段階によつて整備されるものと考へられる。

一九四一年一月 二、一〇〇機

九月 四、五〇〇機

四二年七月 七、三〇〇機

四三年七月 一、四〇〇機

現有機數は艦隊用七〇〇、基地用二、〇〇〇、練習用二五〇〇と概算されるが、機種別は恐らく次の如きものであらう。

海軍航空隊の現勢力は、

戰 闘 機	四五〇
索敵兼爆撃機	九五〇
雷 爆 撃 機	四五〇
索敵兼觀測機	六五〇
飛 行 艇	四五〇

二、米英今後の作戦



米英艦隊撃滅

練習機	一、一〇〇
索敵兼練習機	二〇〇
雑務機	二〇〇
計	四、五〇〇

米海軍の航空兵力の特色は、爆撃機を極めて重視しつゝあり、尙、長距離哨戒爆撃機の活用基地航空機の威力にも大いに期待してゐる様である

こゝに注意しなければならぬことは、過去二ヶ年間に協賛済の軍事費は合計六百八十億ドル。それを、ルーズヴェルトは、大東亞戦争勃發によつて千五百億ドルに増額せんとしてゐることである。O.P.Mのナットセンは、飛行機、造船、高射砲、彈藥、戦車の諸工場に一週間百六十八時間の運轉を命じてゐる。幾分紙上計畫の懐みはあつても、警戒しなければならぬ。

米國商船隊は戦前は總噸數に於てこそ世界第二位を占め、九、三八九、〇〇〇噸を保有してゐたが、仔細に之を検討すると、航洋船舶は七四七隻、四、一三三、〇〇〇噸で、而も老朽船が多く、七〇〇、〇〇〇噸を英國に譲渡した後は恐らく米國自身の通商貿易にも支障を來したものと想像される。

一方、造船能力は如何といふと、國防計畫でも最も重荷に喘いでゐるのが造船工業である點から、少くとも現在迄の成績は漸次増大してゐるとはいへ次の様な貧弱なものである。

一九三九年	四〇〇、〇〇〇—五〇〇、〇〇〇噸
一九四〇年	六〇〇、〇〇〇—七〇〇、〇〇〇噸
	(實際は五四〇、〇〇〇噸)
一九四一年	八〇〇、〇〇〇—一、〇〇〇、〇〇〇噸

二、米英今後の作戦



一九四二年 三、〇〇〇、〇〇〇—三、五〇〇、〇〇〇噸（豫想）

その造船計畫は、昨年七月より一九四三年末迄に建造就航せしめる新造船は、一、一五三隻、一三、四一〇、〇〇〇噸と計上され、次の豫定が立てられてゐる。

一九四一年	一三〇隻	一、四〇〇、〇〇〇噸
一九四二年	五三四隻	六、〇五〇、〇〇〇噸
一九四三年 （第一四半期）	二二〇隻	二、二七〇、〇〇〇噸

この數字は、米國の造船能力の偉大さを表現する前に、必要に迫られ如何に深刻な船舶不足に陥いつてゐるかといふ、苦惱の表現に外ならないと見られるのが至當である。戦時海軍特設艦船及徴傭船舶に充當すべき船舶の莫大

に想到すれば、米國の當面する致命傷が何處にあるかは明瞭であらう。現在に於ても援英だけでも手一杯であるのに、援英を續行しつゝ太平洋においても攻勢をとらざるべからざる現在、米國の苦悶も亦大なるものである。このアメリカ海軍は、全艦隊を一司令長官の指揮の下に置き、これを合衆國艦隊といふ。更にこれを三分して、太平洋艦隊、大西洋艦隊及びアジア艦隊と名づけてゐるのである。

合衆國艦隊

獨立旗艦 ベンシルバニア

三一、四〇〇噸

十四吋砲十二門

二一節

太平洋艦隊

二、米英今後の作戦



米英艦隊撃滅

旗艦	カリフォルニア	三二・三〇〇噸	十四吋砲十二門	二一節
戰艦	ウエスト・ヴァージニア	三二・六〇〇噸	十六吋砲 八門	二一節
第一戰隊	旗艦 テキサス	二七・〇〇〇噸	十四吋砲 十門	二一節
	ニューヨーク	二七・〇〇〇噸	十四吋砲 十門	二一節
	オクラホマ	二七・五〇〇噸	十四吋砲 十門	二〇・五節
第二戰隊	アイダホ	三二・〇〇〇噸	十四吋砲十二門	二一節
	ミシシッピ	三二・〇〇〇噸	十四吋砲十二門	二一節
	ニューメキシコ	三二・〇〇〇噸	十四吋砲十二門	二一節
第三戰隊	旗艦 アリゾナ	三二・〇〇〇噸	十四吋砲十二門	二一節

第四戰隊

ネヴァダ	二七・五〇〇噸	十四吋砲 十門	二〇・五節
テネシー	三二・六〇〇噸	十四吋砲十二門	二一節
旗艦 ウエスト・ヴァージニア	三二・六〇〇噸	十六吋砲 八門	二一節
コロラド	三二・六〇〇噸	十六吋砲 八門	二一節
メリーランド	三二・六〇〇噸	十六吋砲 八門	二一節

(第四戰隊旗艦は戰艦艦隊旗艦を兼務)

これらの戰艦が、即ちアメリカ海軍の主力である。その主砲たる百四十六門の大口径砲こそは、實に海軍に於ける決定的要素なのである。そしてこの手足ともなるべき補助艦隊は次の通りである。

第三巡洋戰隊

旗艦	コンコルド	七・〇五〇噸	六吋砲 十門	三三・五節
----	-------	--------	--------	-------

二、米英今後の作戦



米英艦隊撃滅

シンシナチイ  
オハマ  
ミルオーキイ

七〇五〇噸  
七〇五〇噸  
七〇五〇噸

六吋砲 十門  
六吋砲 十門  
六吋砲 十門

三四・五節  
三四節  
三四・六節

水雷部隊

旗艦 デトロイト

水雷母艦

七〇五〇噸  
三隻

六吋砲 十門

三四・六節

第二水雷戦隊

第四、第五、第六驅逐隊

第四水雷戦隊

第十、第十一、第十二、第十六驅逐隊

第二航空戦隊

旗艦 サラトガ

レキシントン

三三・〇〇〇噸  
三三・〇〇〇噸  
三三・〇〇〇噸

八吋砲 八門  
八吋砲 八門

三三節  
三三節

水上機運搬艦ガンネット

潜水戦隊

旗艦 ボーランド(潜水母艦)

潜水母艦二隻 潜水艦十八隻

機雷敷設隊

旗艦 オゲララ 機雷敷設艦 八隻

以上を戦闘部隊と總稱し、援英のためこの一部が大西洋へ回航される迄は

太平洋岸を根據としてゐたのである。

大西洋艦隊は、元來は大西洋守備のために編制されたものであるが、ハワイ海戦に敗北を喫し、上記の過半の撃滅を見た今日、果して大西洋より補給をし來るか吾々の刮目する所である。

大西洋艦隊

二、米英今後の作戦



米英艦隊撃滅

旗艦 ヒューストン

九〇五〇噸

八吋砲 九門

三三節

巡洋艦戦隊

旗艦 シカゴ

九三〇〇噸

八吋砲 九門

三三節

第二巡洋戦隊

旗艦 トレントン

七〇五〇噸

六吋砲 十門

三三・九節

マープルヘッド

七〇五〇噸

六吋砲 十門

三四・二節

メンフェイス

七〇五〇噸

六吋砲 十門

三三・四節

リッチモンド

七〇五〇噸

六吋砲 十門

三四・二節

第四巡洋戦隊

旗艦 ノーザムプトン

九〇五〇噸

八吋砲 九門

三三節

チエスター

九二〇〇噸

八吋砲 九門

三三節

ベンサコラ

九二〇〇噸

八吋砲 十門

三二・七節

第五巡洋戦隊

旗艦 シカゴ

九三〇〇噸

八吋砲 九門

三三節

ルイスヴィル

九〇五〇噸

八吋砲 九門

三三節

ソルト・レーキ・シチイ

九一〇〇噸

八吋砲 十門

三二・七節

水雷部隊

旗艦 ラレー

七〇五〇噸

六吋砲十二門

三四節

水雷母艦 二隻

第一水雷戦隊

第一、第二、第三驅逐隊

第三水雷戦隊

第七、第八、第九驅逐隊

第一航空戦隊

旗艦 ラングレー

一一・七〇〇噸

五吋砲 四門

一五節

水上機運搬艦 三隻(ライト、サンドパイパー、チール)

二、米英今後の作戦



米英艦隊撃滅

潜水戦隊

旗艦 パシユネル(潜水母艦)

潜水母艦 一隻、潜水艦 二十八隻、救難艦 二隻

艦隊根拠地部隊(太平洋岸の特務艦隊)

第一特務艦隊

掃海艇 四隻、給油艦 一隻、給糧艦 一隻、航洋曳船 一隻、工作艦 一隻

第二特務艦隊

掃海艇 四隻、給油艦 一隻、給糧艦 一隻、航洋曳船 三隻、工作艦、一隻

機雷敷設隊

掃海艇 二隻、敷設艇 一隻

アジア艦隊(ヒリッピンを根拠地とする艦隊)

旗艦 オーガスタ

九〇五〇噸

八吋砲 九門

三三節

巡洋艦 五隻、砲艦 九隻、驅逐艦 十八隻、潜水艦 十二隻

このアメリカ艦隊の編制は、その後多少變更を見たが昨年一月八日、ルー  
ズヴェルト大統領の指令に基づき、ノックス海軍長官が、編成したがその後氷  
島進駐其他で米主力艦隊の一部をバナマ以東へ回航せしめてゐたのである。  
かくて、太平洋作戦と大西洋作戦とを同時にする作戦部長スターク提督がか  
ねて唱ふる「兩洋艦隊論」の實現に、この時より巨大な第一歩を踏み入れて  
ゐたものといふべきである。また同時に、昨年まで十九萬二千人の海軍兵員  
を、新たに四萬五千人増員して、一躍二十三萬七千人に増強したのである。  
アメリカ艦隊には前述の如く、獨立旗艦といふものがある。これは時には  
戦艦をもつて、これに充て、また時には巡洋艦をもつて、これに代へ、或ひ  
は兩者を併用することもある。前世界大戦のヂュットランド海戦に於て、英  
のジェリコー提督は、獨立旗艦アイアン・デューク號により、また獨のシエ

二、米英今後の作戦



ア提督は、獨立旗艦フリードリッヒ・デア・グローセ號により、兩者とも戦艦艦隊の中央に位置して、艦隊を指揮したのである。

### アメリカ海軍の主脳部

この海軍を操る、米海軍の主脳部に、先づハワイ海戦の敗北に急遽オアフ島にとんだ海軍大臣ノックスがある。もともと政治家ではあるが、海軍の事情には非常に明るく、海軍の讚美者であつた。彼がその海軍長官の椅子を獲ち得たことは、まことに彼一生の本懐であつたと想像される。彼が海軍省に入つてから、相つぐ豪壯な大軍擴計畫に、列強を一時腫惹せしめたのも當然なことである。

共和黨員である彼が、民主黨内閣に列席したことは、人も知る名に響いた大海軍黨であるルーズヴェルト現大統領と意氣相投合したからである。彼は海軍大臣就任の時にも「アメリカが太平洋、大西洋の双方に於いて、同時に戦ふ用意なき以上、徒らに日本を刺戟せざることを賢明とす」と聲明したが次第に對日挑戰的言辭を弄し始め、新聞記者團に對しても、露骨な對日暴論を吐いて今日の禍根を招いたのである。

そして、昭和十五年十月五日のワシントンの警察幹部養成所で演説をした時、「アメリカ人は威嚇されて引込んでしまふ國民ではなく、未だかつて外敵と戦つて敗れたる例はない。今日のアメリカ海軍は、世界最大最強のものである。最後の決斷の時機、試練の時機は近づきつつあるが、アメリカは全體主義の世界制覇の夢想者の前に最後の障礙とならう。」と大言した。



次に、チャールズ・エジソンであるが、これは有名な發明王トマス・エジソンの長男で、本年まだ五十九歳の青年海軍次官である。カーレット専門學校から、マサツチュセツツ工業大學に入り、そこを卒業し、一言にして言へば、明敏な行政家であり、アメリカ工業團の海軍に於ける代辯者でもあつた。久しく父發明王の遺した廣汎なる事業を管理し、統率して來た手腕が、海軍次官としての彼の行動に、相當以上の光彩を添へてゐることは事實であらう。彼の豊富な經驗と縦横の手腕とは、アメリカ海軍に一脈清新の氣を導入してゐるものといはれたのである。

彼が、現大統領ルーズヴェルトと親交の間柄になつたのは、ルーズヴェルトの大統領就任と相前後して、彼がアメリカ産業の非常時突破を目指す猛運動を開始した頃である。

大建艦案によつて一躍有名になつたハロルド・スタークは、現在アメリカ海軍の最高將官として、作戰部長の地位にある。

アメリカ海軍が、世界の耳目を衝動せしめた、昨春の大軍擴案の議會突破に、全海軍を代表して推進の大役を成就したのは、言ふまでもなくこのスタークなのである。彼は連日の海軍委員會に出席して、追加建造計畫の絶対必要を説き、大艦巨砲の有利について辭を盡して主張した。「アメリカ海軍が何故にかかる大擴張を行はねばならぬかといふに、今次戰爭に於いて、聯合軍は或ひは敗北の可能性に直面するやも測られず、その時、アメリカは怖るべき敵の聯合艦隊に對抗する用意を整へて置かねばならぬからである。」（昭和十五年一月十一日）とまで極言してゐる。

かくの如く、あらゆる機會を捉へて、大艦の有利を説き、また現に、着々



彼の所信を實行に移してゐるのである。

前作戦部長ウイリアム・ダニエル・リーヒが、謹嚴剛直の老武將であつたに反して、スタークはむしろ才氣煥發の政治家型の武將であるが、その毒舌たるや、日本海軍の建艦を誣いたデマの誇大宣傳に窺へる如く、

「日本は近き將來に、世界海軍史上、未だ曾つて見ざる程度の大驚異を世界に與へようとしてゐる。即ち日本は、排水量に於いて遙かにアメリカ海軍の主力艦を凌ぐ大戦艦三隻乃至四隻の建造を終つた。これらの大主力艦は、すでに就航を待つばかりである。其の他、少くとも四隻、あるひはそれ以上の大主力艦が、一九四二年頃までには、完成の豫定である。かくて、一九四二年には、アメリカ海軍の第一線主力艦の總噸數五十萬八千餘噸であるに比して、日本は六十萬四千七十噸を算するに至るであらう。」(昭和十五年四月十

七日)

如何に自國の大軍擴張策謀に窮したりとはいへ、苟くも「セカンド・ツォー・ナーン」(Second to none)と誇る大海軍國の作戦部長が、かかる言辭を弄したのである。一國の重職にあつて、一言半句を慎むべき立場にある者が、かかる見苦しき驅引を敢てするとは、まことに狂氣の沙汰と言はざるを得ない。

海に近いペンシルヴァニア州に生れた(一八八〇年)六十一歳の彼が、諸先輩を凌いで、この榮譽ある地位に拔擢されたについては、ルーズヴェルト大統領の知遇が、大きな機縁になつてゐるのである。

昭和十四年六月、リーヒ作戦部長の後任に座つたのも、ルーズヴェルト大統領の推挽が與つて力あつたことは否定できない。ここにも、アメリカ海軍



とルーズヴェルト家との傳統的不可分性が現れてゐる。

一昨年十二月一日、彼はアメリカ海軍年次報告發表に伴ひ、こんなことを言明してゐる。

「アメリカ艦隊は、現在恐らく單一艦隊としては、世界最強を誇り得るであらう。しかし世界の情勢に鑑みる時は、まだ充分強力とは云ひ得ない。いまや西半球の將來の安全に對する明白な脅威が加はるに及び、アメリカ國民は覺醒し、如何なる場合にも、對應し得る如く、現在の兵力を増大するため實際的努力が拂はれつつある。國益を防衛するためには、わが權益が攻撃を被るべき地域に、海軍が作戦行動をとる必要がある。このためには、かかる地域に、海軍基地の建設を必要とする。敵兵力が西半球水域に攻め寄せざるのを、有効に阻止するには、アメリカ海軍は大西洋岸より東方に、また太平

洋岸より西方に乗り出す必要があり、このためには前進根據地が不可缺となる。プエルト・リコ、ハワイ、グアム等の必要なる根據地を、わが海外領域に維持すべきである。」

この時から、帝國に對しての作戦はその企畫の全貌を漸く現し始めてきたのである。

ここに、太平洋のことなら「手のひらの筋を數へるやうに」良く知つてゐると、アメリカ人が自慢するジェームス・リチャードソン海軍大將がある。アメリカ合衆國艦隊司令長官に任命されたのは、一九三九年の六月である。一昨年一月（昭和十五年）から、彼は旗艦ペンシルヴァニア號に坐乗して、親しく太平洋の警備に當つてゐる。

對日本壓迫を基調とするルーズヴェルト大統領の極東政策の支柱たるアメ



リカの海軍は「攻撃は最善の防禦なり」といふマハン提督の言葉を、今日もなほ信奉してゐるのだ。しかし、この夢は現實に打ち破られてしまつたのである。リチャードソン提督こそは、スターク作戦部長と共に、この政策の遂行者でもあつたのだ。

昭和十五年十一月八日、ルーズヴェルト大統領と極東問題検討の會談後、提督は「余のハワイ歸還とともに、同水域集結艦隊に不可缺なる兵員數千名を、同地に派遣することに決定した」と言明した。また事實、ロスアンゼルス、サンペドロ、サンディエゴ等の軍港要港には、多數の水兵が新たに配備されたのである。

リチャードソンは、本年六十一歳、テキサス州に生れた（一八七八年）。米西戦争當時、ヒリツピンの近海で、海戦の洗禮をうけて以來、一九二二年

アジア艦隊ナシユヴィル號艦長、一九二三年南支那海派遣隊司令長官、一九三五年六月アメリカ合衆國艦隊參謀長、一九三七年作戦部次長、海軍省航海部長などを歴任して、今日に到つたものである。

彼は、指揮者であつて、操縦者ではないが、政治家的色彩のない武人である。長身赭顔、若き海軍士官の渴仰を一身に集めてゐる。

合衆國艦隊の、戦闘部隊の司令長官は、チャールス・スナイダー大將である。一八七九年生れだから、當年六十歳、ウエスト・ヴァージニア州チャールストンの産。

彼は「先づ打て、強く打て、然して打ち続けよ」といふフィッツシャー提督流の方程式の信者である。徹頭徹尾、猛打主義で、最後のエネルギイを使ひ果すまで、ぐんぐんと猛打しつづける精力家だが、性格的には、リチャード



ソン提督とは正反對で、指揮官タイプにあらずして、むしろ操縦家型である。

作戦第二十一號と稱せられる問題の下に、昨春四月から五月末までに行はれた太平洋上の大演習にも、索敵部隊司令官アドルフ・アス・アンドリュース中將と共に、アラスカ、ハワイ、バナマを結ぶ太平洋を舞臺に、徹底的の大活動をし、作戦にかけては、アメリカ海軍隨一であり、戰略家としても、恐らく今日、彼の右に出るものはなからうといはれる聲望がある。

若き頃、モンゴリア號艦長として、前世界大戦に出動、軍隊及び軍需品の護送に功あつて、ネービー・クロスと感状を授與されたこともある。

一九三一年戰艦ラネツシー艦長、一九三三年合衆國艦隊參謀長、一九三七年海軍大學校長、一九三九年六月中將となり戰闘部隊戰艦群司令官などを歴

任して、一昨年一月、戰闘部隊司令長官になつたのである。

昭和十四年五月、ヤーネル提督の後任として、アジア艦隊司令長官となつて赴任して來たのにトーマス・ハート大將がゐる。

一八七七年六月、ミシガン州に生れ、州政府から選拔されて海軍兵學校に入つたほどだから相當の秀才であつたと考へられる。また、彼がアメリカ海軍隨一の潜水艦戰術家であることは、あまりにも有名である。前世界大戦中には、潜水艦隊司令として、大いに勳功があつた。

このハート提督の要請により、比島に、陸軍二萬と飛行機約百四十機とを増強し、アメリカの西太平洋軍備をますます強化してゐたのである。

ハアリー・ヤーネル少將こそは、對日強硬論者の急先鋒なのである。一昨年十月停年になつて引退しても、なほ何時も機會あることに、日米戦争不可



避の好戰的言辭を弄して、アメリカ國民の反日氣勢を煽り立ててゐた。

ここに、彼の反日的暴論の見本がある。彼は一昨年十一月九日、フィラデルフィアで開かれたアメリカの海軍豫備將校協會總會に於いて、

「極東に於いて、如何なる事態が発生しようとも、アメリカは愕かない。アメリカの海軍は、太平洋に於いて、如何なる勢力とも互角に太刀打ち出来るだけの實力を有してをり、豫想される日本との戦争では、艦隊の一部が撃滅されれば、それで勝敗が決するから、恐らく主力艦隊の決戦は行はれないで片づくであらう。アメリカが日本の意を迎へんとすれば、極東から一切手を引かなければならぬ譯だが、アメリカ政府並びにアメリカ國民が、世界のどの部分からなりとも驅逐されるなどといふことに同意するはずがない。もしアメリカが残された自由國家を援助せんとするならば、戦争は不可避であり

また我々は、これに備へなければならぬ。結局、我々は、戦争によらずして國を維持することは不可能なのである。」と叫んだのである。

ハワイ海戦において一時生死不明を傳へられたキンメル提督は、昨年一月八日の米海軍の大異動により、リチャードソン大將に代つて、太平洋艦隊司令長官になつたのである。また二月一日からはアメリカ合衆國聯合艦隊司令長官となつた。

彼、ハズバンド・E・キンメル大將は、一八八二年、ケンタツキー州に生れ、かの有名なアナポリス海軍兵學校の出身であつた。ルーズヴェルト現大統領が、まだ海軍次官であつた頃、その副官を勤めたことがあるといふから前に述べたスターク大將と共に、青年時代からルーズヴェルトを繞る信任あつきアメリカ海軍のブレン・トラストであつたのである。



キンメル大將は、このハワイ海戦の敗北によつて、當然軍法會議にかけられねばならぬ。その後任は、既にニミツ大將に決定した。

敗將キンメル提督の跡を襲つた新任米國太平洋艦隊司令長官チエスター・ウイリヤム・ニミツ大將は、一八八五年テキサス州に生れ、一九〇五年アナポリス海軍兵學校を卒業、一九〇七年海軍少尉に任官した。一九一〇年潜水艦ナルオール艦長となり、大西洋艦隊潜水隊司令、同潜水部隊參謀長、戰艦サウス・カロライナ副長、重巡シカゴ艦長、第十五、第二十、第十三各潜水隊司令官、驅逐艦母艦リーデル艦長、重巡オーガスタ艦長等を経て、軍務局次長、戰團部隊第二巡洋艦隊司令官を歴任、一九三八年海軍少將に昇進、一九三九年軍務局長となり、現在に至つたものである。

次に、今回米國聯合艦隊司令長官に任命されたキング大將は、一八七八

年オハイオ州に生れ一八九七年海軍兵學校を卒業、米西戦争には大西洋の哨戒任務に當り、後、糧食運送艦ブリッヂ艦長、第五潜水艦隊司令、水上機母艦ライト艦長、海軍航空隊司令官、航空母艦レキシントン艦長、海軍省航空本部長を歴任一九四一年二月大西洋艦隊司令官に轉出したもので、その経歴の示す如く米國海軍航空隊育ての親である。かくしてキング大將は全アメリカ大陸沿岸防衛に對して最高の統一指揮權を握ることになつたのである。

大西洋艦隊の司令長官に新任命のインガソル少將は、一八八三年ワシントン州に生れ、一九〇五年海軍兵學校卒業後、一九一六年作戰部員を経て戰艦コネチカット、アリゾナ各副長、海軍省情報部員、巡洋艦ソコムス艦長、合衆國艦隊參謀長、戰艦サンフランシスコ艦長、海軍省戰時計畫課長、第六巡洋艦隊司令官等を歴任、一九四〇年八月作戰部次長となつた。



スタークに次ぐ軍令部系統の權威者である。

### 残存の米英海軍の戦闘力

さて、この米英海軍の戦闘力を個々に検討すれば次の如くである。戦艦について言へば、過去數世紀にわたつて英海軍はネルソン當時の傳統として、攻撃第一主義を誇り、勢ひ防禦力は手薄を免れなかつたが、これが祟つてジュットランドの海戦ではクインメリーは砲塔を貫いた獨の卅八サッチ砲で爆沈し、この五月には、また世界に誇つた四萬トン巡洋戦艦のフッドが、獨のビスマルク號の一弾で同じ運命を辿つたのである。しかし今日、新たに東亞海軍旗艦となつたプリンス・オブ・ウェールズ號

は、この傳統を一擲し、その防禦力を著しく強化したのであるが、敢へなき最後を帝國海軍の手によつて遂げてしまつたのである。

この砲塔の防禦には四十サッチの鋼板を使ひ、その構造は前に述べたやうに、また水線附近にも艦首から艦尾へかけて、四十サッチの防禦鋼板を張りめぐらしてゐたのである。

そればかりでなく、近代主力艦の決戦距離は大抵の場合三萬メートル前後であるから、彈丸の落角が七十度前後になり、殆んど爆弾と同じになるので從來のやうに舷側ばかりでなく、甲板防禦にも力を注いでゐた。キング・ジョージ五世號の如きものは、非常に厚い幾層もの防禦甲板をもつてゐるのである。

即ち、肝心の主砲としては、九百キロの彈丸を發射する卅五サッチ砲を十



門、四聯裝砲塔二基と二聯裝砲塔一基を収めてある。

この四聯裝砲塔を採用したのも、防禦に力を注いだ結果で、それは二聯裝砲塔二基に使ふ鋼鐵で、四聯裝砲塔一基を作つた方が少い容積ですみ、それだけ厚い装甲を施せるからであつた。

主砲として、四十センチ砲よりも口径の小さい卅五センチ砲を採用した理由は、獨や伊の新銳戰艦の主砲の口径が卅五―卅七センチ程度なのと、また四十センチ砲弾を命中させ難い遠距離からぶつ放すよりも、比較的近距离から發射速度の大きい卅五センチ砲弾を多數叩きこんだ方が有効だと考へたやうである。

しかも、この卅五センチ砲弾は初速が大きく、到達距離は約三萬一千米で英海軍現用の卅七・五センチ砲にまさり、ロドネー級の四十センチ砲に匹敵

するといはれたのであつた。

四聯裝の主砲塔一基を艦尾へ置いた譯は、主砲塔を前甲板にだけ集中したロドネー、ネルソン級の戰艦が演習に際して、後方の敵に對して一大缺陷を暴露して以來である。

次に、魚雷に對する防禦も、從來はバルヂといつて艦の水線下に出つ張つた鋼鐵板製の緩衝室を設け、その中に水などを入れたものであるが、これによつて速力の低下を免れないので、キング・ジョージ五世級はバルヂは設けず、艦の幅を最初から廣くし、舷側に縦横の小防水區劃を多數設けたのである。

對空火器の主體は、副砲を兼ねた十六門の十三・二センチ高角砲で、八基の二聯裝砲塔に収めて片舷に四基配置してあつた。



その他、有名な八聯装の對空機關砲（ボムボム砲）を片舷に二基づつ計四基備へ、重量一キロの彈丸を、各基毎分千六百發の割合で六千米近くの上空まで打揚げて對空火器としてゐたのである。

なほ廿五聯装の高射機關銃三基、廿聯装の高射機關銃一基を置いて、近接する飛行機に完全な集束彈を浴びせるやうにしてゐる。

主機關は十五萬二千馬力を出すバーソンス・タービンで、速力は卅ノット以上を出すから荒天の時などは、小型の艦艇よりもよほど船足が疾い。

また一方、米海軍の新鋭三萬五千トン戰艦ノース・カロライナ號になるとこれは元來が日本海軍を目標として、米造艦技術の粹を傾けて設計したものといはれるだけに、四十センチの主砲九門を、三基の三聯裝砲塔に分けてをり、各砲は千二百疋の彈丸を三萬一千米の距離に發射出來得るのである。

米國の戰艦は遠攻作戰が目標なので、速力を従とし、航續力と防禦力に重點を置いてゐるのが特徴で、この艦も主機關が七萬五千馬力（十一萬五千馬力ともいふ）で、速力は廿八ノットだが、航續力は一萬五千海里以上にのぼるといはれた。

情報によれば、この艦は米戰艦の傳統である電氣推進をやめて、タービン一本槍で進み、多大の重量を節約してゐるさうである。

防禦の嚴重なことは、たとへば装甲の厚さが、主砲塔は四十五センチ、火藥庫を控へた砲塔附近の吃水線附近は四十センチ、上甲板十五センチ、下甲板十センチといふ點からでもうかがへる。

對空火器も、副砲兼用の十二・七センチの高角砲廿門が十基の二聯裝砲塔に收められて、兩側に配置してあり、他に四十ミリの高射機關砲十六門、高



射機關銃十六門を、それ〴〵四聯裝の砲塔に收めて、前橋から煙突のまはりの高所に配置してある。

最近の米戦艦は、従來の籠橋を改めて、わが陸奥、長門が先鞭をつけた格式橋に變へてゐるが、ノース・カロライナになると思ひ切つて獨戰艦の圓錐形橋を採用してゐるのである。

以上、英米の新戦艦を見ると、英國のものは活躍する海面が空軍國獨伊を控へてゐるだけに對空火器が斷然大きく、大小とりまぜて百四十三門にのぼり、米國のものは帝國を目指して航續力と主砲が抽んでゐる。

これ等は何れも、凡ゆる點に最新の技術を傾けて造られ、キング・ジョージ五世級の機關は、材料その他が進歩した結果、ネルソン級の割合にすると十五%程輕くなつてゐると云はれるのである。

また、獨の磁氣機雷を防ぐガウス線帶や、その他特殊の新兵器を積んでゐるといふが、列強専門家の一致した觀測では、三萬五千トン級では、如何にしても攻撃力、防禦力、運動力の完備した不沈戦艦を造ることは、困難だといふことになつてゐる。

さて、かく誇つた新鋭艦も現在のところ、英米に各二隻づつくらひで、この他に英海軍には十三隻の既成戦艦があるが、比較的新式艦は、度々獨潜水艦による損傷を報ぜられてゐるネルソン、ロードネーのほかに、改装されたウナースバイト級で、建造中のものは七隻、一九三九年の計畫にかゝるライオン級は四萬トン艦ではないかと推定される。

米海軍にはハワイで一纏に潰された九隻の戦艦のほかに、大西洋岸になほ九隻の既成戦艦があるが、前回の大戰中に出來たものが多く他國と主力艦の



決戦をした経験のない米艦が、どこまで實戦に強いかは、すでに世界にむかつて公開せられた通りである。

たゞ注目すべきは、目下十五隻が晝夜兼行で竣工を急いでをり、新ヴィンソン案によつて一九三九年に着工された四艦の大型艦のうち、既に二隻進水し、他はアイオワ級の四萬五千トン戦艦六隻、モンタナ級の五萬八千トン戦艦五隻がこゝ五、六年のうちに完成するといふことである。

次に、航空機であるが、米軍はハワイ海戦において四百五十機以上を失つた今日である。アメリカ空軍の最も大きな特徴は大型機の整備にあるといつてよいのである。世界の何れの國を見ても、米國のやうに大型機を大規模に生産してゐる國はなかつた。

アメリカの大型機製作熱のよい例は、昨年六月廿七日ロサンゼルス郊外サ

ンタ・モニカのダグラス飛行機會社の飛行場で、初めて試験飛行をした米陸軍の超重機ダグラスB—一九型の出現である。

これは一九三五年から設計と製作に五ケ年かゝつて昨年やつと完成したもので、翼幅六四米、正規装備重量七四・七トン、ライト・デュプレックス・サイクロン空冷十八気筒二重星型發動機四臺を装備し、發動機の總出力は、八、〇〇〇馬力、高度一、九〇〇米における總出力は六、八〇〇馬力といふ巨大機で、燃料搭載量は四一、六五〇リットル、一八トンの爆弾を積んで最大航続力は一二、〇八〇キロといはれ、更に十人の乗員に對し六、〇九〇米の高度を百時間飛行するのに必要な酸素が携行出来るともいはれてゐる。

しかし、最大速度は毎時僅かに三三四キロでその上、大型機の常として運動性が極めて悪いことが明かであるから、進攻作戦における効果はあまりな



い。米國はこの大型爆撃機のみならず満足しないで更に二、三のものを試作中であるとする。

最近グレン・L・マーチン會社で、このB-19型の約二倍の大きさを持つ超重爆撃機を試作してゐると傳へられてゐる。

同機は一八、一四四瓩の爆弾を搭載して時速四八〇浬で一、〇〇〇浬を飛せし得るといはれるのである。また「空の要塞」と稱してゐる、ボーイングB-17型爆撃機の二倍の大きさの超重爆撃機も試作中で、近い將來に實用化さるべき二、五〇〇馬力四發式の全備重量四〇トン級の超重爆撃機が米空軍の列に加はることであらう。

飛行艇も、全備重量八五トンのマーチン大型飛行艇が完成してゐる。

以上のものはまた機數も少く實戰機とはいへぬが、現にA B C D包圍陣で

わが國を窺つてゐた第一線機は次の如くである。

現在、米國の大型機はいづれも全備重量二〇トン乃至二五トンのものを主力とする方針で整備中で、空の要塞ボーイングB-17型爆撃機はその代表的なものである。

これは全備重量二一、五〇〇瓩、最大速度は一時間五六三浬、また同じ級のものにコンソリデーターB-24型爆撃機があり、B-17型と同様四發を装備してゐるのである。爆弾搭載量は四トン、性能は最大速度は五三六浬、航続距離四、八〇〇浬以上だから、行動半径はその四五%としてグワムと東京間約二、五〇〇浬の爆撃は可能だし、マニラからすると北九州、臺灣は行動範圍に入つてゐるが、帝國の手によつて、その基地は既に爆碎された。



最近までボーイングB—17はマニラ、重慶に、コンソリドP・B・Y五などはマニラ、シンガポール、蘭印に到着して示威飛行を行つてゐたのである。

米國の戦闘機は現在相當に種類が多く、一見きはめて優秀な印象を與へてゐるが、事實は大したことはないのである。性能が十分でなかつたり、飛行性に缺陷があつたりして、僅かに最近二、三種の戦闘機が大量生産されてゐるのが目立つのみである。

ベルP—三九型（エアラコブラ）單座戦闘機がこのうちでも優秀機で、これはアリソン一、一五〇馬力液冷發動機一基を胴體內操縦席の後方に備へ、長軸傳導によつて胴體前方のプロペラを動かす新型のずんぐりした型で、最大時速六四五杼、三七耗機關砲一門、一二・五耗機關銃二挺、七・五耗機關

銃四挺といふ相當な火力を持つてゐた。

一方英國は、最近まで植民地方面には概して優秀な軍用機を配置せず、偵察、爆撃、地上攻撃などに兼用出来る低性能の多用途機を用ひてゐたのである。

従つて、ABC D包圍陣の中には英本國で使つてゐるやうな優秀機はあまり數が多くなかつたのである。所が、最近スーパー・マリン・スピットファイヤー戦闘機、ホーカー・ハリケーン戦闘機がシンガポールその他に到着してゐた。前者は最大時速五九一杼、後者は五三六杼である。戦闘機はこれらの外に米國からブリューンスターフ2A—二型「バッファロー」を購入してシンガポールに配置してあつた。この英機の不足を援ける意味で、アメリカはカーチスP—四〇、ベルP—三九、カーチス二一B等のやゝ舊式戦闘機を重



慶、ビルマ、蘭印に夏渡し戦前既に我が荒鷲の影に怯えてゐたのであつた。

帝國は宣戰以來、八日ハワイ海戦において曠古未曾有の大戦果をあげると同時に、マレー半島方面においては敵前上陸に成功、ウエーク、ミッドウエーを攻撃、比島ならびにシンガポールを攻撃、十日、マレー沖海戦にて、再び英艦隊を屠り、比島ならびにグワム島上陸に成功、十一日、比島首都アガニテ占領、ペーカー島攻撃、十三日、香港の咽喉たる九龍完全占領と同時に、香港攻撃、十六日、英領ボルネオへ上陸成功、グアム島完全占領、ビルマ爆撃、二十三日、ウエーク島占領、二十五日、香港占領つゞいて一月二日マニラ完全占領、十二日蘭印セレベス島メナド占領、息つく間もなくマニラに於ける皇軍は、シンガポールを愕伏せしめた。

比島は、米國の占領以來、五十有餘年、七億九千萬餘ドルを投じてわれに



對する防備を施したマニラ島を始め、ミンダナオ、サマル島等の二千五百の群小なる島からなり、わが航空部隊の猛烈に窒息したキャピテ軍港はマニラ灣に位してゐる。その戦前の兵力は、

海軍 巡洋艦二隻、驅逐艦十四隻、潜水艦十七隻、その他を合し四十五隻。

陸軍 米駐屯軍一萬餘及び比島住民軍約十萬。

空軍 第一、二線機を合して約二百機、別に米本國より先般來到着せし

二、米英今後作戦



米英艦隊撃滅

ボーイングB十七重爆機三十六機。

であつた。

英國が、東亞における「最後の牙城」と恃むシンガポールも、海陸よりの皇軍の猛撃猛撃の爲に窒息したが、これは、マレー半島の尖端にある、面積

二百二十五マイルの小島である。

ここに英國は、第一次世界大戦直後より、巨萬の富を投じて防備をつのり、九三八年これを完成、五萬トン級の軍艦を收容し得る大浮ドックの他、海、空軍の基地として、今日まで近代裝備を誇つてゐたものである。



その兵力は、

海軍 巡洋艦、驅逐艦各六隻、高速魚雷艇その他小艦艇約七十隻、これ

にマレー沖海戦に轟撃沈せられたプリンス・オブ・ウェールズ及び

ビレバルス等の東洋主力が加つてゐた。

陸軍 アンザック（濠洲軍）を主力とする正規軍約七萬、義勇軍約二萬

がマレー方面一帯の配備に當つてゐた。

空軍 第一線機約二百五十、豫備機を合して約五百機。

であつた。

わが降服勸告を拒絶し、無益な抗戦をつゞけた香港も、わが陸海精銳の猛攻の前にあへなく崩壊、去る十二月二十五日遂に陥落したがこの島は阿片戦争の代償として、支那より無法にも割譲した三百九十一平方哩の孤島であ

二、米英今後の作戦



る。

その兵力は、

陸軍 歩兵約五千、砲兵約七千、義勇兵約六千、重軽戦車約百臺。  
空軍 スピットファイア戦闘機約百機であつた。海軍はその全勢力をあ

げてシンガポールに増強せしめられてゐたのである。これらの軍港の陥落の意義は前に述べた通りである。

因みに、英戦車は、獨の刺戟を受けて中型戦車に相當見るべきものが多い。代表的なものとしてマークIV A 巡邏戦車、マークII A 中戦車等がある。



中でも、マークIV A 巡邏戦車については、「敵の猛射に耐へるために、この戦車は紐育の電話帳と同じくらの厚さの装甲板を持つてゐる。たしかにそれは自動車化された銀行の金庫のやうに思はれる」と米國誌が評してゐる。點から考へて見ても、装甲には十分の自信を持つてゐるものやうである。

▽乗員四名▽武装四十七ミリ砲一、機關銃一▽速度五十軒時▽重量十四噸  
▽機關三百五十馬力重量當り廿五馬力。

歩兵隨伴戦車として敵の直撃に耐へるためには、前部は極度に厚い装甲が必要で、砲塔だけでも二・五噸の重量を持ち、ローラーの上に載せられて、手動或ひは手壓速度加減齒車により五秒以内で完全に旋回出来る。

しかし、輕火砲の直射弾を受けると、砲塔内の激動によつて乗員に激しい頭痛を催させるといふ缺點は一般に認められてゐる。これ等の諸元は、装甲



を極度に厚くした點から考へて、相當割引きして考へるべきである。

又、マークⅠA中戦車(廿五砲、四十七ミリ砲一及び機關銃一、廿六籽時)は獨佛戦線で獨戦車隊に對抗したものととして、知られてゐる。

しかし、マレー半島における戦闘において、缺點を完膚なきまでに暴露されたわけである。

わが南洋諸島の癆であつたグアム島は、アメリカ第十四海軍區として、戦略上重要な火山島であつた。マリアナ群島の南端に位し、横濱から一五六〇哩、面積は二二五平方哩あり、昭和十三年以降、米國はこの武装に力を入れ海陸軍兼用の飛行場、無電塔、水上機、潜水艦等の基地として、帝國に對する(ゲリラ戦)の基地として期待してゐたものであるが、今やその夢も打ち破られてしまつたのである。

この陥落によつて、比島の軍事的價値は全く宙にうき、その比島またわが軍に奪取された今となつては、かねての敵米國と比島周邊との聯繫作戦は不可能となつてしまつた。

戦前、米國第十二海軍司令官ジョン・グリースレード少將が、

「もし太平洋に戦火勃發せば、先づ攻撃をうくるもの一つにグアムあり、グアム迎落せば、米國の進攻は不可能なり」

と叫んだのが現實に現れたのである。

おそらく、今後の米國海軍は、英國海軍と合作するか、濠洲の設備不完全なるポート・ダーウイン軍港附近より僅かに我に反撃し來らんものと推定せられる。

しかし、英海軍もマレー沖海戦の惨敗に最早や大艦隊を、獨伊軍の活躍す



る大西洋、地中海より割譲し來たる餘裕もなく、今後は帝國海軍に對して洋上の警戒網をくぐつて、ゲリラ戦に出るものと考へられる。

海上におけるゲリラ戦の主體となるべきものは、潜水艦によるものと、飛行機によるものと二つある。

幸ひにして敵空軍は、わが海陸航空隊の先制奇襲により、殆んど全滅したるも同然であり、敵潜水艦も帝國海軍の捕捉せんとして張つたる網の目をひに、くぐりぬけ得なかつた譯である。

戦前、比島に米潜水艦は十數隻ゐたが、開戦直前これは更に十數隻を増強された。

彼等は我が比島攻撃に當つて、逸早く遁走し、潛望機をひそめて隱密に、わが南方交通線の遮断を狙つてゐたのであるが、その大部は、わが索敵攻撃

により殲滅されたことは、前にも述べた。

米潜水艦は昨春までの情報によると既成百四隻、建造中のもの八十一隻でこれは晝夜三交代制をとつてゐる。

目下計畫中のものを合せると、數年後には二百五十隻の多數にのほり、世界第一位を占めんとする形勢にある。しかし、現在の勢力は大したものではない。

七十隻は舊式の老朽の中型潜水艦で、遠攻に堪へる航洋潜水艦は四十隻位に過ぎないし、實際にはその三分の一程度しか最前線へ出動できないのである。

潜水巡洋艦ともいふべき水上排水量二千トン以上の大型艦は六隻、その中には米海軍が世界に誇る超大型のナワール、ノーチラスの二艦がある。



これらは潜水艦といつても、排水量はわが輕巡の夕張級に匹敵し、水上二千七百卅トン、水中三千九百六十トンといふ代物である。備砲は十五・二センチの砲二門、機銃二挺を有し、魚雷發射管は五十三・三センチのもの六門ほかに魚雷廿本と敷設水雷六十個を積んでゐる。

その長さは百六米で、幅十米あり、甲板の廣さも驅逐艦くらゐで、乾舷が高く、居住性がよいうへに航續距離は二萬六千海里に達してゐる。従つて遠攻作戰に向くやうに見えるが、いざ潜航に移るとなると、差引き千二百トンちやうど驅逐艦一隻分の海水を一分間ぐらゐのうちタンクに満たさなくてはならず、また餘り圖體が大き過ぎて運動が鈍いので建造の當初、實戰に役立たぬのではないかといはれたほどのものである。

しかし、一昨年大改造を行ひ、輕くて力が出る新式のディーゼル機關にと

り換へられたので、出力を増し、速力も元の十七ノットから二ノット程ふえてゐるやうである。

米海軍當局の發表によれば、その耐航性と攻撃力が大きいので、潜水戰隊の旗艦として就役してゐるやうである。

その他、一昨年大手術をして若返つたアゴノート（水上二、七一〇トン）は、列強中最大の敷設潜水艦で、機雷六十個を搭載してゐるといはれるが、前のノーチラス級から推定すると、もつと澤山の機雷を積んでゐるものと考へられる。

つぎに米潜水戰隊の中堅ともいふべき、千四百トン前後の大型潜水艦中、最新鋭ものはサーゴ級（一、四五〇—一、五〇〇トン）で、長さ九十一米、幅七・九米、吃水四・四米、七・五センチの高角砲一門、五十三センチの發



射管八門を備へ、速力は水上十七ノット、水中八ノットと公表されてゐる。

しかしこれは外誌によると正味の水上速力は廿ノットほどで、水面航走から潜航に移るのに約六十秒かゝり、胴體は八つの防水區劃に分れてゐて、百米までの沈下に耐へられるといふ。

なほ、艦の首尾には、遭難した場合にモムセン式の救助函に連絡する特殊の装置がついてゐる。

これよりも一まはり小さい新鋭のバーチ級（一、三三〇トン）は、水上速力十七ノットで六門の發射管を備へ、東洋に多數配備されてゐる。

中型潜水艦では今年度に竣工の筈のマーリン級（八〇〇トン）二隻以外に殆ど見るに足るものはないのである。

一方、英海軍の潜水艦は獨のUボートの活躍が華々しいために餘り喧傳さ

れてゐないが、専門家は米海軍のものより高く評價してゐるのである。

その中の白眉といへばチームス級（一、八〇〇トン）の三隻で、水上では一萬馬力で廿二・五ノットを出し、水中では二千五百馬力で十ノットといはれる。列強の潜水艦中、隨一の快速ぶりで、十二センチ砲一門、五十三センチ發射管六門、機銃二挺を備へてゐる。航續力も相當あり、以前、ロンドンとヴェニスの間を平均十七ノットの高速で航破した記録があるくらゐだから、艦隊隨伴用としてはもちろん、通商破壊に使へば相當威力を發揮するであらうと考へる。

最新鋭艦はトライトン級（一、〇九〇トン）で、装備はチームス級に同じく、水上では四千四百馬力で十九ノット、水中十ノットの性能をもち、現在十二隻就役してゐる。



このほか、變り種といへば四、五年前に竣工した中型潜水艦のシャーク級（六七〇トン）であらう。

これは僅か卅秒で潜航できるといふので、急速潜航潜水艦と呼ばれ、最新鋭のアンダイン級の中型艦と共に英本土の防備についてゐる。

最後に新鋭敷設潜水艦シール級（一、五二〇トン）は、テームス級の装備をもつてゐるうへ、百廿個の機雷を搭載してゐるのである。

獨軍の敷設潜水艦が炸薬量二百キロの強力機雷を、絶えず英の重要港湾や航路に設置し對英逆封鎖を強行してゐる點からしても、この種の敷設艦の威力は決して輕視出來ないものである。

しかし、英國の潜水艦の強味は有力な獨のUボートとか快速艇を向ふに廻して實戦の經驗を経てゐることである。大型潜水艦の多くが、司令塔の前方

に配置する備砲を甲板に直接据ゑつけず、別に設けた高い臺に乗せて、しかも周つてゐるなどはその好い例である。かくすれば荒天の戦闘で、射手が波をかぶり照準を鈍らすことが少ないわけで、最近就役した獨の新鋭大型潜水艦も同様の構造をとり始めてゐるやうである。



### 三、長期建設戦と我等の覚悟

#### 持てる大東亞共榮圈

開戦以來一ヶ月にして、忽ち天下の形勢は、百年以上の飛躍をした。もはや百年前の考へでは萬事手遅れとなつて來たのである。従來ともすれば陥入り勝ちだつた個人を主とした考へ方から、氣宇を天下國家に引き揚げて、この一大進運に遅れずに、歴史的なこの國家總力戦から取残されぬやうに心構へをすることが肝要である。

國民の氣持が、個人主義から國家主義に進展しなければならぬ時である。

島國根性から飛躍して大海洋國民の氣持に進まねばならない。今までの日本の廣さと、これからの新日本の廣さに、どれだけの差があるかを、自覺してこれに備へる覺悟がなくてはならない。

また警戒すべきことは、次々の勝報に有頂天となり南方資源は、明日にも無盡藏に日本に輸入され、物資の缺乏は直ちに解消されるが如き安易な心持に墮してはならぬことである。

しかし、我等を待つ南方資源は次の如くである。

#### 一、蘭印の農産資源

(一九三八年生産量、單位千トン、×印一九三九年度統計)

生	産	輸
ゴ	ム	出
量	量	量
三二一、六七四		三〇二、八八四

三、長期建設戦と我等の覚悟



米英艦隊撃滅

キ	ナ	皮	×	一二、〇〇〇	六、五九四
砂	糖			一、三七六、〇〇〇	一、〇七一、〇〇〇
茶	コ	ヒ	×	八四、〇〇〇	八一、〇八八
カ	カ	オ	×	一一四、二六九	六八、九三六
煙	草		×	一、七〇〇	一、三三四
油	椰子	×		五四、二七四	四八、八九〇
コ	ブ	ラ		二四三、〇〇〇	二三一、五七六
米				八二二、八九四	五五六、四八四
玉	蜀	黍	×	四、四五五	一六
カ	ツ	サ	バ	一九、〇二六	九四
カ	ボ	ツ	ク	八、三二九	二六四
カ	ボ	ツ	ク	五四、八四〇	五四、四九〇
カ	ボ	ツ	ク	一一、九七三	一六、三四四

サイザル麻 ×

一〇九、五七八

この生産量のうち世界における總生産量に對する比率は

生	ゴ	ム	二五%	
キ	ナ		九〇%	
砂	糖		八%	
茶			一六%	
コ	ヒ	一	五%	
煙	草		一・三%	
油	椰子		四八%	
胡	椒		八五%	
カ	ボ	ツ	ク	六五%

三、長期建設戦と我等の覺悟



である。特に、キナ、胡椒、カボックは蘭印の獨占的生産物であり、油椰子、生ゴムは準獨占的生産物である。その輸出量を見れば、世界商品としての、これ等資源が有する地位も自ら明かである。

次に鑛産資源も重要なものが多い。その主なるものは次の如くである。

二、蘭印の鑛産資源

(一九四〇年概定生産額、錫のみ一九三九年、單位トン)

金	二、五八五
銀	四六、四八八
錫	二八、二〇〇
石炭	二、〇〇〇、六八〇
マンガ	一一、九〇〇
ニッケル	五五、五四〇

雲母	七、九三八、九九三
石油	二七五、二二二
ボーキサイト	一七、二五二
硫黄	三四、〇八五
磷酸鹽	

鑛産資源のうち最も重要なものは石油と錫とである。

蘭印の石油産出量は、世界全産額の約三%にしか當らないが、全世界の總生産量の六〇%までが米國に集中してゐたのであるから、殘餘の四〇%中の三%は決して無視すべき數量ではない。

東亞におけるその他の石油産地は北樺太、英領北ボルネオ、ビルマ等であるが、これ等を總計するも三百萬トンに過ぎないのであるから、蘭印の石油

三、長期建設戦と我等の覺悟



産地として東亞に有する地位は言を俟たぬのである。

錫は、全世界生産の一八%弱が蘭印から産する。

英領マレーの四三、八〇〇トンと合すると、全世界の五〇%近くをこの兩地方で産するのである。従つて米國、英國が今まで蘭印、マレーの錫資源確保に狂奔してゐたのである。

またニッケルの如きは、世界の産地が殆どカナダ一ヶ所で、その他には僅かに佛領ニューカレドニアを數へるに過ぎないのであるから、數量は假令多くなるとも亦品質は必ずしも良好ではないが、セレベスのニッケル生産は十分に注意されるべきものである。なほ、わが國の調査によれば年産十五萬トンと推定せられ、埋藏量は二千萬トン位である。

ボーキサイトも調査によれば、年産四十萬トン以上ありといはれる。品質

も良く、埋藏量も三千萬トンを超えるから、わが國のアルミ工業の原料として極めて重要である。

その他、蘭印の鑛産資源は未開發のものが多く、開發が進捗すれば生産量は更に増大すべく、未知の資源も發見される事が可能である。

例へばタンングステン、ウオルフラム、クローム、銅等も蘭印に存すると考へられるし、鐵鑛石も品質はあまり期待出来ないが、ボルネオの南東部に二億七千萬トン、セレベス中部に五億トンの埋藏資源ありといはれる。

蘭印の中でニューギニアは現在まで調査もおくれ、開發も殆どなされてないが、潜在資源は相當豊富なものありと考へられる。

現在まで知られてゐるものとして石炭、金銀、コブラ、石油、棉花等があるのである。



三、長期建設戦と我等の覚悟

英領マレーは、米、ゴム、コブラ等の農産物と、鐵、錫、石炭、金、マンガ  
ン、ボーキサイト、磷鑛等の鑛産資源に恵まれて、その産額は次の如くで  
ある。

一、英領マレーの農産資源

米	一九九、二六〇千ガントン（一九三七—三八年）
ゴム	三六〇、八九八トン（一九三八）
コブラ	六八、七五四トン（一九三八）
油椰子	五四、三七七トン（一九三八）

二、英領マレーの鑛産資源

（一九三八年）  
四三、二四七トン

石炭	四七七、九〇八トン
金	四〇、二〇九オンス
マンガン	八、九一〇トン
ボーキサイト	五五、〇八一トン
磷鑛	一五九、八八九トン

英領マレーの資源として最も良く知られてゐるのは、錫およびゴムであり、  
共に世界第一の生産地である。

錫は全世界の二七%以上を、ゴムは四二%近くを産出するのである。

ヒリッピンは、資源的に他の地方に比して價値は低い、なほ次の如きも  
のを擧げ得る。

一、ヒリッピンの鑛産

（一九三九年生産高）

米 英艦隊撃滅



金	一、六三三、六三七オンス
鐵	一、一六六、七一八トン
ク	一三二、一七七トン
銅	一二、〇九三、六七〇ポンド
マン	二九、三九四ポンド
ガン	

二、ヒリッピンの農産

(一九三八年産額)

穀	五二、二四五、二一〇カバタ
玉	八、七八二、四二〇カバタ
蜀	一一三、五五八、六一〇カバタ
糖	九二、一二六、四九〇カバタ
椰子	二、六〇七、三八〇ピクル
マ	
ニ	
ラ	
麻	

煙	草	七八一、三八〇ピクル
カ	カ	八八八、四七〇キロ
カ	オ	

その中で重要なものは鐵と銅とマニラ麻である。

鐵鑛は南方圏の他の地域マレー、海南島からも多量に産するので、ヒリッピンの鐵鑛に期待を持つ必要はないが、銅は南方における唯一の産地であり將來一層重要性を發揮するであらうと考へられる。ビルマは農産物として米(八百六十九萬トン——一九三八年)、ゴム(七千トン——一九三八年)の他に、次の如き鑛産物を産する。

一、ビルマの鑛産資源

(一九三八年但し石油のみ一九三九年)

錫	四、五〇〇トン
---	---------

三、長期建設戦と我等の覺悟



米英艦隊撃滅

石	油	一、二〇〇千トン
タングステン		三、五二九トン
鉛		八九、〇〇〇トン
亜鉛		五五、八〇〇トン
鐵	鐵	一一、〇〇〇トン

そして、わが友好國である、泰、佛印は、米、ゴム、棉、錫、ウオルフラムを産し、かく總括すれば、大東亞共榮圈の自主權は確乎たるものであり、この資源を多年に亘つて壟斷してゐた米英が憎むに餘りある搾取家であり、侵略者であつたことは、今更喋々の要はないであらう。

持たざる富國アメリカ

米國は世界第一の資源自給率を誇つて、鐵、銅、鉛、石炭、石油、棉花等十五の重要物資の生産においては世界第一を記録してゐるが、しかしそれでも左の十四種は供給が極めて不安であり、米國軍部によつて「嚴重なる消費及び配給統制手段の必要な」、いはゆる戰略的原料に指定されてゐるのである。

アンチモニー、クロム、マンニラ麻、椰子殻炭、マンガン、水銀、雲母、ニッケル、石英水晶、規那、ゴム、生糸、錫、タングステン、このほか戰略的原料に比して、やゝ重要性の低い不足資源としてアルミニウム以下十五の緊急的原料が存在する。

これらの不足資源のうち東亞に對して依存せねばならぬものは、

アンチモニー

米國の輸入額の八%

三、長期建設戰と我等の覺悟



ク	ローム	二三%
マ	ンガ	一四%
ゴ	ム	九七%
生	糸	七五%
錫		八〇%
キ	ニーネ	九九%
タ	ングス	六九%

等があり、これらはいふまでもなく西太平洋制海權の喪失により全く獲得絶望といはざるを得ないものなのである。

従つて自動車、航空機工業、鐵鋼業の戰時重要産業が、ゴム、クローム、マンガ、タングステンの缺乏に早晚悩むことは、復興金融會社が出資した、

ゴム貯藏會社、金屬貯藏會社の活動にも拘らず、火をみるよりも明かである。

しかも、米國の資源的悩みはこれにつきないのである。ブルックス・エメニーは、「米國の強大は西半球の大部分を領海として支配することが出来、従つて國內でこと缺く原料も大部分は自己の支配圈内から獲得し得る」と豪語してゐたのであるが、中南米諸國が米國に引摺られて對日宣戰を行ふ時は、米洲近海における海上ゲリラ戰の展開は必至であり、その場合

ポ	ーキ	サイト	全輸入額の九八%
ニ	ツ	ケル	九九%
沃	度		一〇〇%

等の鑛物資源を初めとし、コーヒー、砂糖等中南米産の農産資源の確保も危



むまれるのである。

アメリカが一番困るものは、先づゴム、錫、それからキニーネである。中南米は少し産出するだけで、不思議なことには、ゴムもキニーネも初めは中南米にあつたものが之を移植してから、今では約九十六パーセントが、こちらで出来るのである。これを抑へられると、キニーネは、殆んど入手不可能となり、英米ともに、キニーネがなければ困る地方が澤山あるが、さういふ地方へは、今後米英人ともに行かれなくなる。キニーネを押へられると、その方面を投棄せざるを得ないといふ結果になる。

またニッケル、マンガン、タングステン、かういふものゝ缺乏によつて、製鋼は一頓挫を來たし、特殊鋼による強靱な鐵鋼を得ることができない。従つて、軍艦でも、飛行機でも、彈を受ければ、すぐ穴のあくやうな脆弱なも

のしか作れなくなる。つまり、この戦争によつて、アメリカは明らかに逆封鎖を受けつゝあるのである。

同様に一般貿易も樂觀を許さないものがある。

米國の對アジア・大洋洲輸出（一九三八年において全體の二〇％）の喪失はまだしも米洲への輸出（三〇％）も不安になり、英國を除く對歐洲輸出（四五パーセント）の全面的杜絶と相俟つて、米國産業に對する影響は漸次深刻化して來るものと思はれる。

また米國として考へさせられるのは中南米からの輸入である。世界有数の農産國たる中南米の食糧資源は、到底米洲のみにて消費し盡すことは不可能であり、更にドイツ潜水艦の活躍により英國の海運危機が激化し、米國との輸出も船舶不足と海上不安のため低下する時、中南米諸國は激烈な農業恐



慌を來すであらう。米國が何か有効適切な手を打ち得ないならば、ドル外交で堅めた米國の中南米制覇に重大な間隙が生ずるであらうが、基本的に農業國を一舉に工業化する望みが少い以上、この歸結は到底避け難いものである。

英國に於いても、その戦時經濟は米國からの物資援助と、印度、濠洲、マレー、蘭印等東亞からの物資輸入と二本のルートにより辛うじて運営されてゐたのであるが、東亞ルートはシンガポールの死命を制せられた今日、直ちに我が海上部隊の脅威に曝されることゝならう。

カナダが米國に軍事的にも經濟的にも全く依存する今日、英帝國は本質において單なる印度洋帝國にすぎないのである。

印度洋を繞つて印度、濠洲、南阿等の植民地があり、そこから石油（イラ

ン、ビルマ、蘭印等）錫、ゴム等幾多の重要資源を得てゐるから、印度洋の安全を脅かされれば、英帝國は分散解體の危機に直面せざるを得ないのである。一方、獨の大西洋攻撃の激化は米英の海上連絡の途絶をも招來し得るであらう。獨ソ戦の勃發によつて一時救はれた英國の海上危機は、大東亞戦争を機に再び逆轉したのである。このやうにして、アメリカは一たび南方よりの物資の輸入が途絶すれば、忽ち軍需生産に支障を來たし、一方ストライキは激發し、平和産業や、運輸、衣服にまで困る事態を惹起し、國內の動搖は悪化の一路を辿るであらう。

制海權の喪失によつて、アメリカの失つたものは、單に米太平洋艦隊全滅だけの問題ではないのである。

と云つて、我々は憍安の夢をむさぼつてはをれないのである。この際に、



今日の不自由は、なほ續くものと覺悟して、不拔の力を蓄はへて將來雄飛の下準備をするのが賢明と思はれるのである。

### わが國土をねらふ空襲と商船撃沈

最後に國民に、わが海軍としては、かういふことを感謝しようと思ふのである。

それは、今までわが海軍に對して、海軍はとても弱くて、アメリカの海軍の敵ではない。アメリカとは戦争がし得ないのだといふことを國民の一部で言つてをつたものがありはしなかつたかと思ふのである。

いや、多少耳にしないでもなかつた。しかし、今一度蹶起すればわが海軍

は忽ちにして、素晴らしい戦果を挙げえたといふことによつて、非難は何處へやら、わが海軍に對して絶大なる信頼を向けて來たといふことは、日々の献金の上にも、或ひは祝辭の上にも、又我々のところに寄せられる電報や祝ひの手紙にもよく現はれてゐるのであつて、日本全國民一心同體になつて、わが海軍に對する信頼が湧いて來たのが分るのである。

この信頼といふものに我々は非常に感謝してゐるのである。この氣持だけは、どうか今後とも熱情を下げないで、あくまで持續して戴きたいものである。

帝國海軍は、諸先輩より現在の當局に至るまで多年に亘る準備と努力を續けて來たのであつて、一度正義の御戦が發せられるや、天佑神助の下に、この準備と、この訓練と、この信念とをもつて、帝國海軍は、その分擔する部



門に於ては、今日の如き戦果をあげ得ることは、誰一人として疑ふものはないのである。

唯一つの心配は、武力戦以外のいはゆる総力戦に於て、帝國國民がいかにかつたのである。しかるに、今や大詔は渙發せられ、全國民火の玉となつて奮勵し、總力戦に關しても、何等の心配を必要としない境地に突き進みつゝあることは、誠に感激に堪へないものがある。

また海軍としては、敵もまた奇襲作戦を企圖しないとは限らないので、勝つて兜の緒をしめて、更に嚴として大洋の護りにつき、國民の期待を裏切らぬやうに努力してゐるのである。

それ故、今後は帝國海軍がよしや多少の損害を蒙ることがあらうと泰然自若として、決して狼狽や動搖しないで頂きたい。わが海軍の必殺戦法は、敵

に肉を斬らして骨を斬る、この殲滅的攻撃戦法で戦つてゐるからである。

又、海軍が護衛してゐる商船の一部が、ゲリラ戦による敵潜水艦に不運にも沈められたり、また國民の必需品が場合によつて多少窮屈になることがないとも決して断言し得ないが、その場合はあくまで冷靜な大國民としての襟持を忘れないで頂きたい。

我が海軍が敵を奇襲するとすれば、それと又同様に彼等も應じて來ることは當然考へられるのである。

今日、わが海軍は根本的の敵防備——即ち、敵が飛び出す前の根據地を叩き潰すといふ戦法をやつてゐるのである。しかし、また太平洋艦隊は全滅せりとは云ふものゝ、討ち漏らした敵の數機が日本にまで飛來して爆弾で盲爆を敢行しないとも断言は出來ないのである。又、わが近海へ、敵潜水艦が現



はれて、物資を運ぶわが商船を再び撃沈しないとも云へないのである。

それは、イギリスが世界に誇る大海軍力を擁し、イギリス本島の制海権を握つてをりながら、あの狭い海峡を縫ふて出沒する獨逸潜水艦に、一千万トンの商船を撃沈されてゐる事實からしても、四邊海なるわが本土にあまねく、潜水艦撃滅のための艦船部隊を短い間隔において網を張つておく事は、不可能であるし、かりにさうしたとしても、海底を潜つてくる潜水艦を悉く捕捉撃滅することは絶対に不可能に屬することである。

しかし、米國よりの發表によれば、太平洋沿岸一帯は我が潜水艦の襲撃を受けて、船舶の撃沈されるもの相當の數にのほり、恐怖の極に達して、その結果として、太平洋沿岸一帯の商船は釘付けの状態となり、加ふるに南方資源の輸入も途絶して、大混亂を來たしてゐることは、わが海軍によつて、太

平洋の制海権が確保されてゐる事を示すものである。

それ故に、たま／＼わが商船の撃沈の報に接しても、動搖することなく絶對に海軍に對する信頼の念を持續して、それに對して萬全の備へをしてゐることを銘記されて、かならず最後の勝利はわれ／＼が獲得するものであることを國民は據りどころとして、わが海軍が十分な働きをするといふことを信じてゐて貰ひたい。

感謝と共に、かういふ希望を申述べて置きたいと考へるのである。

### 希望ある我等の前途

今や大東亞戦争による世界平和確立の大波紋は、太平洋から印度洋、地中



海、大西洋へと擴がりつゝある。

この大いなる波紋は、米英の世界制覇の恣意を撃碎するまでは斷じて收らないのである。

この外敵を打破る部門は、我々軍人が、誓つて國民の信頼に應へ得ると信するものである。

武力以外の部門、ことに生産や建設の雄大なる事業については、各その職場において大いに力を揮つて頂きたい。

「一勝に安んずる勿れ！」

これが、我々の信條である。勝利の感激の大なる事は、私共も全く同意であるが、その興奮も、感激も須らくかゝる建設的方面への獻身的努力、己を空しうしたる精勵の形によつて、強く表現せられることこそ最も望ましいことである。

とである。

とくに、今次の戦争は、長期建設戦であり資源獲得戦である。従つて、今後は大海洋國として、船舶の増加に努力し、港々を日の丸の船でうめ、さらに世界のあらゆる海上を、わが日の丸の商船でうづめなければならぬと思ふ。

さて、これらを護衛し、安全に通商が出来るやうにするためには、非常な海軍力を必要とすることは云ふまでもない。即ち、偉大なる海洋國にならない限り、この戦果を全ふすることはできないのである。

東亞の民族が、米英の桎梏から解放されて、それ／＼其所を得て、生活し、それ／＼異つた豊富な物資を有無相通じてこそ、はじめて、本當の共榮ができるのである。